

宮崎県児童詩教育史

宮崎県における「赤い鳥・児童自由詩」の展開

菅 邦男

一、「赤い鳥」童謡からの出発

日本の教育の歴史を見ると、学校の教師だけではなく、時代時代に数多くの文人たちが文学教育や作文教育の分野を通して、直接間接的に教育に関わっている。詩教育でも、三木露風、西条八十、百田宗治、竹中郁、あるいは井上靖、丸山薫、灰谷健次郎、その他数多くの詩人や作家たちが関係している。それは子供のための作品の創作であったり、百田宗治のように国語教育誌の創刊であったり、あるいは児童作品の選評という形であったり、様々である。子供のための作品創作という意味では、夏目漱石や竹久夢二までが童謡を創作しているほどである。丸山薫や灰谷健次郎のように、実際に教壇に立った人も少なくない。

しかし、詩教育、中でも児童詩の分野で最も大きな足跡を遺しているのは、何と言つても北原白秋である。白秋は詩人であり歌人でもあるが、童謡詩人としても知られる。

例えば、「あめあめふれふれ かあさんが」で始まる「あめふり」、「春は早うから 川辺の葦に」の「あわて床屋」、他にも、「雨」、「揺籃の歌」、「砂山」、「ペチカ」、「からたちの花」、「かやの木山」、「待ちぼうけ」、「この道」、「城ヶ島の雨」など、挙げていたら切りがないくらいである。曲の良さもあって、いずれも人々に親しまれた歌ばかりである。ある年齢以上の者にとって白秋は、子ども時代、その名は知らなくても、その作品には必ず出会うといった存在であった。

北原白秋にとって、これらの童謡を生むきっかけとなり、発表の場ともなったのが、雑誌「赤い鳥」である。

「赤い鳥」は鈴木三重吉によって大正七年七月に創刊されるが、その目的は「芸術性に充ちた格調高い読み物を日本の子供達に与えたい」というものであった。子どもたちに何か読ませたいと思つてもろくな読み物が無い、それなら自分たちで雑誌を出して「良いもの」を子どもたちに読ませようということである。

創刊号の表紙をめくると、「赤い鳥」の標榜語^{モットー}が掲げられている。

○現在世間に流行してある子供の読物の最も多くは、その俗悪な表紙が多面的に象徴してゐる如く、種々の意味に於て、いかにも下劣極まるものである。こんなものが子供の真純を侵害しつゝあるといふことは、単に思考するだけでも怖ろしい。

○西洋人と違つて、われ／＼日本人は、哀れにも殆未だ嘗て、子供のために純麗な読み物を授ける、真の芸術家の存在を誇り得た例がない。

○「赤い鳥」は世俗的な下卑た子供の読みものを排除して、子供の純性を保全開発するために、現代第一流の芸術家の真摯なる努力を集め、兼て、若き子供のための創作家の出現を迎ふる、一大区画的運動の先駆である。

○「赤い鳥」は、只単に、話材の純清を誇らんとするのみならず、全誌面の表現そのものに於て、子供の文章の手本を授けんとする。

○今の子供の作文を見よ。少くとも子供の作文の選択さるゝ標準を見よ。子供も大人も、甚だしく、現今の中等なる新聞雑誌記事の表現に毒されてゐる。「赤い鳥」誌上鈴木三重吉選出の「募集作文」は、すべての子供と、子供の教養を引受けてゐる人々と、その他のすべての国民とに向つて、真個の作文の活例を教へる機関である。

歴史的に見て、「西洋人と違つて、われ／＼日本人は、哀れにも殆未だ嘗て、子供のために純麗な読み物を授ける、真の芸術家の存在を誇り得た例がない。」というのが、正しい発言かどうかは一概に言えないが、趣旨は分かる。

また、この標榜語によれば、鈴木三重吉の意図には、子どもへ「文章の模範」を示したいということもあつたわけである。したがつて、三重吉が集めてきた書き手は、そうそうたるものだった。「現代第一流の芸術家の真摯なる努力を集め、」というだけあつて、当時の有名作家が勢揃いという感じである。「『赤い鳥』の標榜語」の末尾には、「○泉鏡花、小山内薫、徳田秋声、高浜虚子、野上豊一郎、野上弥生子、小宮豊隆、有島生馬、芥川龍之介、北原白秋、島崎藤村、森林太郎、森田草平、鈴木三重吉其他十数名、現代の名作家の全部を網羅してゐる。」とある。

そんな中で白秋は、詩（童謡）の分野で大きな位置を占めている。創刊号の巻頭には童謡「りすりす小栗鼠」（北原白秋）が掲載され、白秋がいかに重要な人物として迎えられたかを示している。（因みに、この創刊号には芥川龍之介の有名な作品「蜘蛛の糸」も掲載されている。）

鈴木三重吉の、子どもへ「文章の模範」を示したいという意図は、こうした作家たちの一流の文章（作品）を読ませるといふことだけで

はなく、子どもたちから綴方と童謡を募集するという形をもとつた。綴方は鈴木三重吉、童謡は北原白秋の担当である。

児童詩の歴史は、したがつて「詩」ではなく、童謡から始まつたのである。

二、「赤い鳥」における童謡の募集

（一）最初の号に掲載された宮崎の小学校

↳ 中郷村梅北小学校

「赤い鳥」が子どもの童謡を募集するのは大正八年二月号からだが、実際に子どもの作品が最初に掲載されたのは、大正八年の四月号である。この時既に宮崎県から入選者が出てゐる。中郷村梅北尋常高等小学校（現・都城市）の鎌田正直という子どもの作品である。

鳥

宮崎県中郷村梅北

尋常高等小学校 鎌田正直

こんなに小さくなつてから、

鳴き／＼とほる 黒鳥

黒い鳥よどこへ行く。

夢の御殿へまゐります。

（「第二巻第四号」大正八年四月）

初めの二行は写実的だが、後の二行がいかに童謡という感じである。童謡として書いたのだからそれで良いとも言えるが、「詩」として見ると、最後の一行が浮いてしまつてゐる。意味的にはむしろ、

「ねぐらへ帰って寝る、夢見る」の意味である。この一般化した「鳥が夕暮れになって巢へ帰る」という発想には、「わらべ唄」の影響が見られる。

ただ、これは同時に掲載された他の作品も同じ事である。

ふぶきのけしき(賞)

北海道有珠郡壮瞥
尋常小学三年生 三橋みつ

あさおき見れば、ゆきふりて、
こゆきのやうな、ゆきふりて、
がくかうへゆく、人こまり、
ポブラの上に、ふりつもり、

いぬはよろこび、とびまはる、
うまはふうく、つかれはて、
ねこはこたつで、まるくなる、

松はいつでも、あをくと、
はアらのくさは、まつ白だ、
どちらの山も、まつ白だ、
どこのやねにもゆきつもり。

これは賞を受けている作品だが、ここにも明らかに「わらべ唄た」の影響が見られる。むろん二連目の「いぬはよろこび、とびまはる」「ねこはこたつで、まるくなる」は直接的には『尋常小学唱歌(二)』(明治四十四年六月)「雪」の「犬は喜び庭駆けまわり、猫は炬燵で丸くなる。」の影響があつたとも考えられる。しかしこれも、もともと

は「わらべ唄た」からの発想であらう。

参考までに、北原白秋の『日本伝承童謡集成』から石川県の「わらべ唄た」を挙げてみる。

雪やこんこん、霰やこんこん、

降つても降つてもまだ降りやまぬ、

仔犬こいぬ よろこぶ、おいらは寒い、

河原の地藏さまよけ寒いとさ。

(石川)

「ふぶきのけしき」という作品は、雪の白さと松の青さとの比較など、情景はよく伝わってくる。ここらあたりが評価されたのかも知れないが、いずれにしろ、「童謡」を書くということが、子どもたちの頭に強くあつたことが分かる。最初のこと、童謡を作るとなると、子どもとしても何か基盤になるものがないと作れなかつたのかも知れない。「わらべ唄た」は、身近な参考例だったのである。

むろんこれは作爲的ということではない。意識的にというより、「わらべ唄た」の一節が自然に口をついて出たということなのだろう。北原白秋が鈴木三重吉に請われて「赤い鳥」に参加したのは、「私は、少しも虚飾のない、真の意味で無邪気な純朴な文章ばかりを載せたいと思ひます。」という三重吉の考え方や、当時の学校唱歌を初めとして非芸術的なものしかないという現状批判に共鳴したからである。白秋は、明治以降西洋一辺倒になつた教育を批判し、なかでも学校唱歌を西洋に偏つた非芸術的なものとして厳しく批判して、日本の伝統である「わらべ唄た」を基調とした童謡の復興を主張している。したがって、「作爲的」ということを非常に嫌っている。

「童謡は昔から子供がしぜんと歌ひ出したものは実にいゝのがあります。大人が子供のために作つたものは、どうしても大人臭くていけ

ません。思ひきり子供になつて簡単に歌ふことです。さうして深みのあるのが理想的です。子供の観る自然は凡て幼くて清新で驚きに満ちてゐます。調子ばかりが童謡風になつても内容が大人くさくては何にもなりません。すつかり子供に還つて歌つて下さい。」

(北原白秋 「第一巻第二号」 大正7年8月号)

白秋にしても、子どもの自然な心の叫びである「わらべうた」は理想だつたのである。

それしても、最初の号から宮崎県の子どもの童謡が採用されているのは驚きである。最初に掲載されるということは、創刊号から、あるいは創刊されてから間もなく「赤い鳥」を入手しているということである。当時の宮崎にあつてこんなに早く「赤い鳥」に注目し、子どもに作品を投稿させたのは誰だろうか。恐らく同小学校の教師である。というのは、同年八月号には、同じ小学校の黒田大丈夫という子どもの作品が掲載されているからである。

ひよ鳥さん

左様ならひよ鳥さん。

わたしは春がすきなよ、

あなたは寒い冬がすき、

海山こえてはるばると、

さむい所へおかへりか。

また来年になつたらば、

寒い冬が来たならば、

わたしのまちへいらつしやい。

左様ならひよ鳥さん。

宮崎県北諸県郡梅北

尋常高等小学校

黒田大丈夫

身近な渡り鳥である「ヒヨドリ」をうたつた、なかなか可愛らしい作品である。一読すると、女の子の作品かと思つような表現だが、やはり「童謡」という意識からこういう表現になるのだろう。

これは大正八年八月号だが、前掲の「鳥」は四月号である。同じ年の四月と八月に同じ学校の子どもの作品が掲載されるのは、当時の経済状況を考えれば、同校の教諭の指導によるものと考えるのが自然であろう。

当時の職員録である『宮崎県学事関係職員録』（宮崎県教育会編）を見ると、大正八年八月版には、梅北小学校は、次のように記載されている。

梅北尋常高等小学校

学級 一四

児童 六三四

校長

安藤 登熊

訓導

三五	横山 初
三〇	川崎 浅吉
二五	竹元 傳助
二五	松崎 栄秀
二三	熊本 虎任
二一	米丸計佐蔵
二一	松田 吉二
一八	梅北 兼二
一八	井上 チカ
一八	本部 八二

一七 長井 イソ
一五 米丸 林

専訓

二三 鬼束 敬吾
一五 大田 フサ

准訓

一六 隅 水青

(筆者注 漢数字は俸給を示す)

梅北小学校が「赤い鳥」に登場するのは、大正八年のみである。それ以降は一度も名前が見られない。ということは、指導者は、八年に梅北小学校にいて、九年には転勤した教師ということになる。そこで大正九年版の『宮崎県学事関係職員録』を見てみると、名前が消えているのは、松崎栄秀、熊本虎任、松田吉二の三人である。このうち松崎栄秀は、後に、昭和戦前期の児童詩の指導者である教師と同じ学校に在職している。このことについてはまた後述するが、その後の宮崎県児童詩教育の展開から見て、松崎栄秀が指導者だったのではないかと考えている。

(二) 教師たちの「赤い鳥」への通信

↳ 佐土原小学校訓導「井上呉水」の投稿

「赤い鳥」第一巻第四号(大正七年十月一日)には、教師たちから寄せられた便りが掲載されている。

※ 「赤い鳥」は子どもの為にもなり、私たち教員に取つても非常に参考になります。私も受持児童の綴り方をおめにかけたいと思ひます。尚今後作文には評と文話とを附加して下さいまし。

(富山県中新川郡東水橋町、加賀谷良二)

※ 「赤い鳥」が出たお陰で児童の世界に漸く明るみがさして来たやうな気がいたします。私も二号から賛助読者にして頂きました。私の生徒たちがそのためにどんなに好い影響を受けることせう。

(北海道天塩国増毛尋常高等小学校、尾久才吉)

※ 私は児童詩教育に対する私の信条から、小学校教員その他の人々に、出来得る限り広く、「赤い鳥」の如き雑誌の真意義が理解されるやうに努力してをります。次に今回「曙童話会」を設け近隣村二三学校職員たちと共に童話の研究をするつもりでをります。

(群馬県群馬郡大類村、大澤雅休)

※ 「ぶくく／＼長々」のお話を受持の児童に話しましたら大喝采でございまして。これから綴り方をどん／＼お目にかけたいと思つてをります。

(三州刈谷亀城校、森銃三)

これらを読むと、「赤い鳥」が教師たちにどのように迎えられたか、よく分かる。中でも、近世・近代の伝記研究等で知られる森銃三の投稿が目される。代用教員時代のことだが、鈴木三重吉の翻案である「ぶくく／＼長々火の目小僧」等を子どもたちに読み聞かせていたのである。この作品は第一巻第一号および第二号に連載されたものであるから、森銃三は第一号から読者だったことになる。

第二巻第六号(大正八年六月一日)には、宮崎県の小学校教師「井上呉水」の投稿が「通信」欄に掲載されている。

児童達に雨の日には、「赤い鳥」の童話を、作文の時には入選の綴りを、読み聞かせ、或は直接に読ませて奨励致居候。

(宮崎県佐土原小学校、井上呉水)

宮崎県においても、教師たちは「赤い鳥」を購入して、子どもたちに読み聞かせ、作文の模範にもしていたのである。子どもたちも心待ちにしていたらしく、他県の教師の投稿には、次のようにある。

「赤い鳥」を毎号多大の喜びを以て迎へてをります。私は童話研究のためと自分の慰安の為に、いつまでも「赤い鳥」の愛読者として御尽力申したいと思ひます。児童等は月の初めから、「先生、赤い鳥はまだですか〜」と言つて翌月分を待ちこがれてゐます。そして一度手にすると、終りまで読み通さないと承知をしません。

(愛媛県上浮穴郡明神小学校、森正秀)

「赤い鳥」は地方の子どもにとつても大変な楽しみだったのである。ただ経済的に個人での購入は難しく、教師が自費で購入して子どもたちに読み聞かせていたようである。「第五巻第四号」(大正九年十月)には、賛助読者名簿に宮崎県関係者として、南崎清、岩屋ヶ平尋常小学校、芝原源等、土生利吉の名が見えるが、大正九年版『宮崎県学事関係職員録』によると、南崎清は名水尋常高等小学校訓導である。名水尋常高等小学校は、学級数六、児童数二四五の小規模校である。多くの教師がこのように個人名で登録しており、個人購入だったことが分かる。

岩屋ヶ平尋常小学校は学級数一、児童五十三名の僻地校である。職員は、校長・牧野實作、准訓導・牧野ユリの二人で、おそらく夫婦である。

『北方町史』(昭和四十七年六月)によれば、岩屋ヶ平小学校は村役場から距離十二キロ、標高六百五十メートルの山上にあり、そこからは「延岡市街や太平洋が望見できる」位置にある。明治三十八年に三植小学校分教場として認可され、翌年「草葺平屋建一棟」で開校し

た。明治四十四年に岩屋ヶ平尋常小学校として独立している。昭和十五年に火事で全焼し、十七年に新築落成しているから、大正九年頃は、まだ、この「草葺平屋建一棟」だったはずである。このような山間の僻地校で、夫婦二人の教師が「赤い鳥」を購入して、子どもたちに読んで聞かせていたのである。

昭和五十五年二月に発行された『北方町のあの村この里く古老が語る今と昔』(北方町教育委員会)には、この岩屋ヶ平尋常小学校での夜学の話が出てくる。

大正七・八年頃からと思うが、岩屋ヶ平小学校に於いて夜学がはじまり、青壮年の学習の場ができました。

時の校長は、牧野牧治先生であったと云われ、夏は夜八時頃より、冬は夜七時頃から勉強しようと思う人が通つてきたそうです。

昼間の労働で、疲れた体での夜学であるが、熱心に勉強しようと思ふ者が出席していました。四キロメートルもある山道を通うには、大変な努力が必要であったと言われる。

当時、通学する明りといえば、小田原提灯をぶらさげて、下駄や草履で細い小道を通つたそうです。

夜学の教科書もあったといわれ、此の頃も読み、書き、珠算で向学心のない人には、出来る事ではなかったと思うが、反面、家に居ても何の娯楽もない時代で、ただ夜学に行くだけの青年もいたと聞いています。明りはもちろんランブであったそうです。

兄の思い出話によれば、勉強の嫌いな者は、珠算のある時はソロバンを持って行かず、読み書き、の時は教科書を持って行かなかつたと云っています。

帰りは人家もなく、大声をあげてわめきちらして帰つたそうだが、これも若者のエネルギーの発散の場であつたようです。

夜学は、十時頃まであり学費は不用で、一人当り月に、一銭の油代を出していたと云われ、夏は蚊、ノミに喰われ、冬は寒さに手足が凍る思いであったようですが、此の夜学は私が、高等科を卒業した時にはなくなっていました。

この夜学が後の青年学級へ発展し、又山間地の青年の基礎的な学習の場として非常に大きな教育効果をもたらしたことになる。

藤の木 橋倉一夫記

「岩屋ヶ平小学校」の環境と、地域における役割が、よく分かる。当時の青年は、昼間でも大変な道を往復八キロ、労働後の体で「小田原提灯をぶらさげて、下駄や草履で細い小道を通った」のである。それはとりもなおさず、学区の子どもたちも同様に、「昼間でも大変な道を往復八キロ」通っていたということでもある。

夜学は他でも行われていたらしく「蔵田の夜学」という文章では「大正なかば頃迄の青年は、今では八十才前後になつておられ、若い頃、教師を招き夜学をしておられた熱心さが記憶に残っている。北久保山黒原の学校に勤めておられた先生が一里余りを夜間歩いて来てくださったものである。」(山本喜一記)とある。青年たちの学習意欲もさることながら、そのために夜間一里余りの道を歩いて来る教師もすごい。この時代の教師の意気込みを見る思いがする。

岩屋ヶ平小学校での夜学であるが、「時の校長は、牧野牧治先生であつたと云われ」と書かれている。「牧野牧治」は「牧野實作」の間違ひであろう。牧野實作は大正八年には既に岩屋ヶ平小学校の校長になつてゐるからである(牧野ユリは「代用」)。「兄」からの伝聞なので、聞き違い、あるいは記憶違いかと思われる。ただ大正七年版の『職員録』が現存してないので、それ以前は確認できず、大正七年以前に「牧野牧治」という校長がいた可能性も否定は出来ない。しか

しいずれにせよ、大正七、八年頃から始まつたのなら、牧野實作が関わっていたことは疑いない。「夜学」の話から、この山間部の僻地校でなぜ、当時の最新の児童文化雑誌である「赤い鳥」が購入されていたのか、分かるような気がする。

こうした歴史を持つ岩屋ヶ平小学校であるが、過疎化のため、昭和四十五年三月に廃校となり、今は存在しない。

牧野實作は後に東臼杵郡第二富高尋常高等小学校に転動しているが、その時には、どういうわけか、訓導として記載されている。昭和五年版『宮崎県学事関係職員録』では、校長に次ぐ筆頭訓導である。「学級数七 児童数三〇三三、訓導五人、准訓二人、代用一人という小さな学校だが、当時は、僻地校では一時的に校長を務めるということがあつたのだろうか。

その他、「第四卷第三号」(大正九年三月一日)「賛助読者名簿」の「間世田重義」、第四卷第九号(大正九年九月一日)「賛助読者名簿」の「椎葉了圓」なども訓導である。

間世田重義は大正九年版『宮崎県学事関係職員録』に三股尋常高等小学校(学級数一五 児童数八五三)の訓導としてその名が見える。三股は都城の隣町であり、梅北小学校とも近く、「赤い鳥」をめぐる間世田と梅北小学校の教師の間に交流があつたとも考えられる。宮崎大学の同窓会(木犀会)名簿によると、間世田重義は明治四十二年宮崎師範学校本科第二部卒業である。梅北小学校の松崎栄州は明治四十三年同師範学校本科第二部卒業であり、年齢も近く、同じ本科第二部卒業である。顔なじみで交流があつたとしても何ら不思議ではない。あるいは彼らを中心とする「赤い鳥」派のグループがあつたのかも知れない。

椎葉了圓は同年、桑弓野尋常高等小学校に准訓導(尋常)として在職している。学級数四、児童数一七一、職員は校長他、訓導一、准訓

二の小規模校で、椎葉了圓はその末端を占めている。前年の職員録には「代用」とあるから、若い教師である。

なお、前述の「赤い鳥」に投稿していた井上呉水の在職していた佐土原尋常高等小学校は、現在の宮崎郡佐土原町立佐土原小学校であり、当時、学級数一四、児童数も六八〇という中規模校である。

「井上呉水」はむろん号であるが、当時の職員録には次のようにある。

佐土原尋常高等小学校

学級 一四
児童 六八〇

校長

五三 前田 甲蔵

訓導

三五 山口 徳行

二五 小早川三省

二三 齊藤 茂市

二三 富永 吉祐

二二 河崎清次郎

二二 小野 エイ

二一 伊地知 和

二〇 齊藤 直義

二〇 河野ミツエ

二〇 金丸 ヤス

二〇 鬼塚 重彦

一五 山内 浪蔵

一三 井上 ヒロ

一三 菊田 モリ

専訓

一五 平井みさを
代用
一四 前田登良雄

(大正八年八月版『宮崎県学事関係職員録』)

井上呉水は号であるから無論その名はないが、訓導の後ろから二番目に「井上ヒロ」の名前が見える。大正九年版『宮崎県学事関係職員録』(九月)では、訓導の末尾に「井上ヒロ」の名が記されている。

校長

前田 甲蔵

訓導

山口 徳行

齊藤 茂市

富永 吉祐

河野 和

河崎清次郎

鬼塚 重彦

齊藤 直義

徳丸 茂一

小野 エイ

金丸 ヤス

高橋 信義

菊田 モリ

井上 ヒロ

前田登良雄

専訓

井上 サエ

(大正九年九月版『宮崎県学事関係職員録』)

大正九年版には専訓に「井上サエ」という名も見えるが、これは八年版にはなく九年からであるから、「井上呉水」は「井上ヒロ」であろう。大正七年版の職員録が現存しないので前年に在職していたかどうかは分からないが、掲載されたのが大正八年六月であるから、投稿から掲載までの日数を考えても、まず間違いはあるまい。

ヒロという名から、女性であり、俸給や名前の位置から考えて、かなり若い教師である。名水尋常高等小学校の南崎清も五人の訓導の後ろから二番目に位置しており、若い教師である。宮崎の地でも、こんなに早く、「赤い鳥」を購入し、子どもたちに読み聞かせをしていた教師たちがいたわけだが、それも主として若い教師たちだったのである。

「井上呉水」は自分でも童謡を書いていたらしく、大正八年の「赤い鳥」十月号には、創作童謡欄（北原白秋選）に「昔の靴」という作品が掲載されている。

昔の靴

宮崎 井上 呉水

私のおべとにどろつけた、
にくいお靴はどうしてる。
兄さんのお靴が恋しいな、
今はあつかろ、おとなしかり。

〔第三巻第四号〕大正八年十月一日

筆者注 復刻版「赤い鳥」では、最終行「今」のところはかすれていてはつきりとは読めないが、字形とルビから「今」と判断した。

今は遠い所へ行った兄を、妹である「私」が偲んでいるのである。「兄さん」は亡くなったのだろうか。まだ元気で一緒に遊んでいた頃、わんぱくだった兄が、何かの拍子に、靴で自分の来ていた着物を泥で汚したのである。あの靴はどうしているだろう。もう動き回ることもないだろう。遠い所へ行った兄さんが恋しい。そうした意味だろうか。「あつかろ」が何故「あつかろ」なのかよく分からないが、「焼かれて」熱いのか。それとも「暑い地方に居る」ということか。「暑い」であれば兄は遠く暑い地方に居ることになるが、それでは「おとなしかり」が意味をなさない。亡くなった兄を偲んでいる歌とるのが自然であろう。

いずれにしても、内容からして、これは女性が書いたものである。「井上呉水」という名前は固くて男性的な感じがするが、この童謡からすると、女性である。「井上呉水」は、佐土原尋常高等小学校訓導の「井上ヒロ」であると断定しても良さそうである。

井上ヒロは、大正八年から十年までは佐土原小学校に在職しているが、その前後は職員録が現存しないので分からない。大正十四年の職員録には名前がないので、十一年から十三年の間に異動があったものと思われる。

なお、この号には、「少年自作童謡選外佳作」として、「大波小波（宮崎野崎浄禅）」とある。

「第二巻第三号」には、「綴方選外佳作」欄に「僕」という題で、「宮崎野田敏夫」の名が見える。

※「第二巻第三号」（大正八年三月一日）

綴方選外佳作 僕 宮崎野田敏夫

賛助読者名簿

◎宮崎 油津町日曜コドモ会

◎宮崎 黒木理一

宮崎県初の「綴方選外佳作」「賛助読者」である。宮崎県の賛助読

者名が「赤い鳥」誌に載るのは、九州各県の中でも最後に近いが、それでも結構早くから宮崎でも読者がいたわけである。特に油津（現・日南市）の「日曜コードモ会」は注目される。どういふ集団なのか詳しいことは分からないが、大正八年当時に県南の油津に、「赤い鳥」を購入していた団体があつたのである。

綴方にしても、結構早くから投稿していたのである。個人的なものか、学校の指導によるものかは断定できないが、学校だとすると、掲載年から考えて、あるいはこれも梅北小学校の子どものかも知れない。いずれにしろ、詩や綴方が掲載されているということは、このほかにも多数の子どもたちが投稿していたということである。

作品が掲載されるということは、子どもや家族はもちろん、教師にとつても大変なことだつたようである。「第三巻第五号」（大正八年十一月一日）には、次のような教師からの投稿が載っている。

私が去年から教へてゐる五味重郎君が、二度までも綴方に入選したので、私は嬉しいといふよりも何だか恐ろしい気がいたします。重郎君は身体が多少弱いので、お婆さんが心配してはよく私の宅を訪ねて来ます。おとなしい気の弱い少年ですが、一家揃つて兄弟仲の良いこととは羨ましい程です。八月号に入選した時など、お婆さんが私のお陰で、もあるかのやうに、涙を流してお礼を言はれるので、大いに恐縮いたしました。柔い芽を傷つけまいと考へて、「赤い鳥」の標榜語の通り飾らずにお書きなさいと、そのみを常に言つてゐます。

（長野県諏訪郡高島小学校、北澤才太郎）

「赤い鳥」がどれほどの権威を持っていたか、入選が教師にとつてもどんなに名誉で喜ばしいことだつたか、よく分かる例である。

「第三巻第一号」（大正八年七月一日）では、二人が綴方選外佳作

に選ばれている。

綴方選外佳作 ○雨やんで 宮崎秋山敏孝

○今日から六年生、いやな雨 同齋藤とよ子

（なお、参考までに記すと、この号には後の小説家大岡昇平の童謡「赤いボン」も掲載されている。当時小学校五年生である。十一月号では、「思ひ出」という題で綴方選外佳作になつてゐる。）

「第四巻第一号」（大正九年一月一日）には、同じく「綴方選外佳作」に「ゆめ（宮崎川野和夫）」とある。

そして、「第五巻第四号」（大正九年十月一日）で初めて、宮崎の子ども綴方が鈴木三重吉選「模範綴方」に掲載されるのである。

（三）宮崎県初の綴方入選

く児湯郡美々津小学校く

せみ

宮崎県児湯郡

美々津小学校尋三

中埜 棕

私はせみをとらうとおもつて、うちの上のものゝ木の根もとへ行つて見ると、太いせみが何匹もとまつてをりました。私がふくろをかぶせますと、せみはふくろの中ではた／＼してゐます。私はせみばかり見とれてゐましたので、石にけまつれて、うつむけにたふれました。とれたせみは逃げて行つてしまひました。今度はうちの前の大きな榎へ行きますと、又太いせみがとまつてゐました。私はよろこんで今にふくろをかぶせようと思ひましたら、兄さんが石を投げつけましたので、せみはにげて行つてしまひました。私はもうしやうがありませんから、

えんへ上りますと、とぶくろに、大きなせみのやうくぬけたのがをりました。私はよろこんでそのせみをとつて兄さんに見せびらかしました。兄さんもほしくなつたのか「やれ」といひましたから、私は「あかべのちやのこ」といつて、にげ出しました。兄さんがおつかけて来ました。私は田の中へにげ込みました。そこにお父さんが来なすつて「田の中へ入るといかん」とおつしやつたので、私が田から出ますと、すぐ兄さんにつかまへられました。私はせみをにがしてやりましたが、まだようまひませんので、とう／＼兄さんととられました。私はざんねんでたまりませんでしたから、兄さんにとびつきますと、兄さんはそのせみをつまみころしました。わたしはそのときのくやしかつたことは、いつまでもわすれませんでした。

〔第五卷第四号〕大正九年十月一日

蟬をめぐる兄弟の争いを淡々と描いているが、鈴木三重吉は「綴方選評」で、「中野君の『せみ』は三年以下の作中では比較的に一等よいものでした。」と短く評している。

この号には、「賛助読者名簿」に前述した○宮崎南崎清 ○宮崎岩屋ヶ平尋常小学校 ○宮崎芝原源等 ○宮崎土生利吉 の名があり、次号には三人の選外佳作と三人の賛助読者名が見える。この三人の賛助読者が教師であるか否かは、今のところ分らない。

▽創作童話選外佳作 稲の穂 (宮崎石川善石)

▽自作童謡選外佳作 水あび (宮崎寺町重志)

おうま (宮崎清水次郎)

▽賛助読者名簿

○宮崎大橋轍 ○宮崎甲斐鏡史

○宮崎木村幾之助

なお、美々津小学校の指導者が誰であったか、判然としないが、当時の職員を記しておく。

美々津尋常高等小学校

学数 一四
児童六三八

校長

八五 日高 旦

訓導

六〇 平田 宗續

五一 黒木 盈

五一 橋口 竹夫

四八 戸高喜千蔵

四八 吉田 墨治

四八 三輪 寅治

四八 黒木 留一

四三 河野 晴栄

四〇 黒木 シメ

四〇 近藤テル工

三四 安藤 錦

三四 後藤英太郎

専訓

二九 小野ナミエ

准訓

二九 梅田 良一

(四) 童謡入選

↳ 高原尋常高等小学校准訓導・押領司篤政↳

「第五卷第六号」（大正九年）の北原白秋選「入選童謡」には、押領司篤政という人の作品が掲載されている。「入選童謡」は、大人の書いた入選童謡を掲載した欄である。

雨

宮崎 押領司篤政

雨、雨

止め、

山に行つた、

子供が、

みイのかさ、

もたぬ。

（「第五卷第六号」大正九年十二月一日）

全部で二十三篇の大人の創作童謡が掲載されているが、その十四番目の作品である。

ねむの葉

兵庫 児玉善遠

あの子を寝かそ、

この子を寝かそ、

子守の月が今出たほどに、

ねんくねむの葉に、

蒔いて寝かそ。

渡り鳥

東京 桐野信吉

飛んでも飛んでも、

薄の野原。

五日五晩、

渡り鳥渡れ、

玉蜀黍

佐藤勝熊

とうもろこしの、

おひげ。

一寸剃れまいぞ、

おできが沢山、

痛ござる。

これが一番目から三番目までの作である。作品としては整っているが、最初のは「わらべうた」の痕跡がはつきり見られる。二作目も「わらべうた」によくある素材（雁）である。三作目はそういう意味ではオリジナルで、発想が面白い。これらに比べると、押領司篤政の「雨」はやはり落ちるといふことだろう。「雨」の前後の作品は次のようなものである（差別的な用語が含まれるものは避けた）。

ぶだう

不詳 渋谷んぼ

坊主、坊主、

むら坊主、

むら／＼坊主が、
百五人、
お白粉つけて、
さあ、どうぞ。

カナブンブ

群馬 村田午郎

真つ暗闇から、
飛んで来たカナブンブ、
火を下さいな、
火を下さいな。

「ぶどう」は、つるつるしたのを単に坊主に喩えた思いつきのもの
のである。「カナブンブ」も、「火を下さいな」と言つて飛んで来て、
それから何をするでもないから、思いつきのものと言うしかない。
ただ、子どもに「こういう見方をする面白よ」ということが伝わ
るということはあるだろう。いずれにしても、ちよつとした雰囲気だ
けである。こつとしたものが「童謡」だと考えられていたのだろう。
「雨」（押領司篤政）も、蓑傘を持たずに山に行った子どもを気遣うち
よつとした気持ちをつたつたものであり、わらべうたに見られるパタ
ーンである。

参考までに記すと、この号の「自作童謡」（子ども）には、後の画
家岡本太郎の作品が、「推奨」に入選している。見開き二頁に四篇の
作品が掲載されているが、その一番目である。小学校三年生ながら、
極めてユニークな発想である。

きりんのくび（推奨）

東京芝区慶應
幼稚舎三年生 岡本太郎

きりんのくウブ
天までとゞく、
お月様の顔を、
四角いしいろ。

北原白秋も選評で「今月のも子供たちのが優勢です。ですが今度の
推奨は先月のより劣つてゐます。然し岡本君の『きりんのくび』は子
供らしい突飛さがなか／＼大人には歌はれませぬ。」と、その独自性
に注目している。

第六巻第四号（大正十年四月一日）には「地方童謡（十二）北原白
秋選」に、宮崎県の童謡が報告されている。

△

ねんねこ、さんね子、酒屋が子
酒屋が子はどこに行た。
あの山越えて里へ行た。
里から土産は何々か。
牛子が一匹、馬子が一匹。
どけ、つねぢたか。
向へん木の下つねぢたど。
なにユクはせちたか。
去年の栗殻と今年の蕎麦がらと、
だつ食はせ、

だつ喰はせしてゐたど。
翌日行たつ見たや、

牛子もをらず、

馬子もをらず

あせくい、あせくいしをつたや

むくよん実が出ツ来た。

囃ん割るにや惜ゆし、

つん割るにや惜ゆし、

囃んわつて見たや、

七つになる稚児さんと、

五つになる姫さんと、

かみしも来て入つちよらつた。

註。(一)どこへ繫いでおいたか (二) つないでおいたぞ。(三) 何を食は

せておいたか (四) まげては食はせまげては食はせ (五) 行つて見た

ら (六) 探し／＼してゐたら (七) 羽子につける黒い木の実

(宮崎県西諸地方―押領司篤氏報)

筆者注「栗殻」(くりがら)は、栗殻(あわがら)かとも思えるが、本文
のままにして置いた。

なかなか面白い童謡だが、報告者の「押領司篤」は前述した童謡
「雨」(「入選童謡」)の作者で、「押領司篤政」である。「政」が抜けて
いるのは第六巻第四号のミスである。大正九年版『宮崎県学事関係職
員録』(九月)には、高原尋常高等小学校の尋常准訓導として名前が
出てくる。高原小学校は学級数一五、児童数七四四であるが、職員は、
校長他、訓導九名、尋准四名、代用四名である。「押領司篤政」は尋

准四名の中の下から二番目であり、若い教師である。

大正十年の、その他の宮崎県関係の記事は、以下の通りである。

* 「第六巻第五号」(大正十年五月一日)

▽綴方選外佳作 ○宮崎大倉伸一

* 「第六巻第六号」(大正十年六月一日)

▽綴方選外佳作 ○宮崎北出到

* 「第七巻第一号」(大正十年七月一日)

▽「赤い鳥」賛助読者名簿 ○宮崎田崎菅子 ○宮崎八代文庫

* 「第七巻第三号」(大正十年九月一日)

▽「赤い鳥」賛助読者名簿 ○宮崎池田初子

(五) 「童謡」から「児童自由詩」へ

「第七巻第四号」(大正十年十月一日)には、児童自由詩の先駆
けとなる「雨」が掲載されている。

雨(第二推奨)

和歌山県日高郡由

良村小学校尋四年

芝田やす

あめ、やめ、

あめ、やめ、

あめがやまねば

かつゑます。

註。この作者のお父さんとお母さんは日傭稼ぎをしてゐられるのだからで
す。

この作品は童謡というより、今日から見れば、明らかに児童詩である。「生活詩」つまり、生活綴方の作品だと言われても頷けるような詩である。白秋は次のように評価している。

*白秋評

「面白がりや、うまいこと言はうといふ気持をはなれて、ほんたうに子供は子供の生活を歌はねばなりません。芝田さんの、「雨」。これもほんたうのうたです。あめがやまねばかつます、といふ、かういふかなしいことがあるでせうか。ほんたうのことを言へば人を泣かせます。うまいうたをつくるよりほんたうのうたを作らねばなりません。」

「第二推奨」ではあるけれども、白秋は「ほんたうのうた」として評価している。「うた」という言葉にもあるように、まだ童謡を募集しているという意識であるにせよ、この作品を評価しているのである。そして次号、第七巻第五号（大正十年十一月一日）からは、それまで「童謡」という言葉で作品を募集してきた入選作品掲載欄を、「自作自由詩」と改めている。編集後記でも、「自作自由詩募集」とか「自由詩」という言葉を使っている。

「第七巻第五号」（大正十年十一月一日）の（推奨）は、次のような作品であった。

夕方（推奨）

長野県下伊那郡上

飯田小学校五年 三村 彦一

夕方島で草むしり、

ひぐらし鳴くそのそばで
さびしい夕方の草むしり。

これも完全に童謡を脱しているが、白秋は次のように評している。

*白秋評

「夕方」

これは短い俳句の寂びに似た感じを与へます。一行と三行とが同じやうな繰り返しになつてゐて、それで立派にととのつた、いい詩のたちができてゐます。普通の童謡によく見るやうな、面白がりや、頓知などは少しもなくて、別に、珍らしくもないやうですが、それがいいところです。童謡といへばみんなが興がつたものと思ふとまちがひです。かういふ風に静かに、おとなしく、子供は子供の生活を歌ふといふことが、たいせつです。ひぐらしの声がよく草むしりと調和してゐます。これなどは少しも大人の詩とちがはないうたでせう。大人でも子供でも本当に純粹なものとはみんな同じことになる筈です。

（第七巻第五号）大正十年十一月一日

「いい詩のかたちができてゐます」と言いながら、「童謡といへばみんなが興がつたものと思ふとまちがひです」「これなどは少しも大人の詩とちがはないうたでせう」と、これも童謡の一種とし、詩とは「大人の詩」のことだと考へてゐることが分かる。しかし、次の作品の評では、はっきり「自由詩」という言葉を使っている。

でんでんむし（推奨）

山梨県北巨摩郡

鳳来小学校尋三 小林りつ子

ねぎぼうずに
たかつてゐた、
でんでんむし、
ねぎのあたまで、つのが
ひつこんでしまつた。

*白秋評

この見方は実に鋭くて細かです。本当に生きた蝸牛といふものをよく見てゐます。で、蝸牛の生命がこの詩で生きて動いてゐます。とにかく真面目でちつと見た上でできたものです。本当の詩といふものはかういふのです。童謡といふものを、ただ滑稽なものを歌ふといふ風に考へてゐる人が多いやうですが、かうしたのが本当にいい童謡、といふより自由詩です。私の歌に、

「大き葉に
ふと角ふれて
かたつむり
驚きにけむ
身ぬち練めつ。」
といふのがあります。よく考へて下さい。本当に純な心や眼で、見た通りを歌ふと、大人のも子供のも、おなじです。少しもちがはないでせう。

「かうしたのが本当にいい童謡、といふより」と述べたり、自分の歌と比較するなど、また童謡から抜け出ていない気味はあるが、言葉として「自由詩です」と明確に述べている。その辺の事情を、次号で、

次のように述べている。

募集童謡について

北原白秋

前にもうしあげて置きたいことは、前月から童謡を自由詩としてゐますが、これは童謡の方が少いので仕方なしに区別しないで、自由詩の名の下に集めてしまひました。実をいふと、童謡は童謡、自由詩は自由詩と区別して別々に掲載したいのです。この区別は、童謡は大人が子供の心で、またはそのために歌つたのと子供のとあります。つまり児童の民謡なのです。児童の自由詩は、大人の詩人たちが現在大人の言葉を使つて作つてゐる自由詩の行き方と同じく、子供が子供の言葉で作つた自由詩なのです。民謡とは区別しておきたいのです。で、来月あたりから二つに分けます。そのつもりで童謡とか自由詩とか書いて送つてほしいのです。

童謡は調子を、とにかく里謡としてとのへねばなりません。詩の方は主としてリズム本位のもので、静かに歌ふとか味わふといふ方がだいいです。で、童謡の方は可なり大ざつばでやれますが、詩の方ですと、もつと細かくリズムが動いてゆかなければなりません。さうしてもつと自由です。子供たちに詩をおすすめするのは、それとやると、一番ほんたうの気もちが流れ出るからです。ただ童謡の方では、思ひきつて自由でリズム本位があります。それから自然そのまな調子で出るのがあります。さうしたのはかまひません。しかしさうしたのと、自由詩との区別は子供のでは中々むづかしいので、子供自身にも困るのでせう。

(「第七卷第六号」大正十年十二月一日「通信」欄)

「子供たちに詩をおすすめするのは、それでやると、一番ほんたうの気もちが流れ出るからです」と、子どもの本当の気持ちを書くためには「詩」の方がよいことを認めながら、「児童の民謡」としての童謡をあきらめきれない様子がうかがえる。しかし「前月から童謡を自由詩としてゐますが、これは童謡の方が少いので仕方なしに区別しないで、自由詩の名の下に集めてしまひました」と白秋が言っているように、「子供は子供の生活を歌ふといふことが、たいせつです」（白秋）ということになれば、生活を見つめるのであるから自由詩になるのは自然なことであり、童謡が減るのは当然のことである。こうして、この後、児童自由詩が主流となつていくのである。

このほか、「赤い鳥」における宮崎関係者の動向は、以下の通りである。

- ※「第八卷第四号」(大正十一年四月一日)
賛助読者名簿 ○宮崎海老原武明 ○宮崎佐藤長男
- ※「第九卷第二号」(大正十一年八月一日)
賛助読者名簿 ○宮崎三輪好子
- ※「第九卷第四号」(大正十一年十月一日)
賛助読者名簿 ○宮崎鈴木あい
- ※「第十卷第一号」(大正十二年一月一日)
賛助読者名簿 ○宮崎西山尚
- ※「第十卷第二号」(大正十二年二月一日)
賛助読者名簿 ○宮崎川越五郎
- ※「第十卷第三号」(大正十二年三月一日)
賛助読者名簿 ○宮崎佐藤甚作 ○川口幸平
- ※「第十卷第四号」(大正十二年四月一日)
賛助読者名簿 ○宮崎宮尾唯志
- ※「第十一卷第一号」(大正十二年七月一日)

賛助読者名簿 ○宮崎前川彦太郎

※「第十一卷第二号」(大正十二年八月一日)

賛助読者名簿 ○宮崎工藤秋三郎 ○川口慶治

※「第十四卷第五号」(大正十四年五月一日)

▽自由画選外佳作 ○宮崎八木織江 ○同松本操

※「第十五卷第五号」(大正十四年十一月一日)

▽創作童話選外佳作 ○宮崎岩切佐久弥

※「第十六卷第三号」(大正十五年三月一日)

▽綴方選外佳作 ○宮崎杉田秀夫

▽自由画選外佳作 ○宮崎松田秀夫

※「第十六卷第三号」(大正十五年三月一日)

▽綴方選外佳作 ○宮崎西島茂 ○同柴田堅太郎

○同山田照夫

「賛助読者名簿」にも八人ほどの名前が見えるが、このうち「川口幸平」は大正八年に清武小学校、翌九年には生目小学校の職員名簿にその名が見え、小学校訓導である。他は教師であるかどうか、今のところ確認出来ない。

これを見ると、宮崎の子どもたちも、選外佳作とはいえ、健闘している。

参考までに述べると、「第十六卷第五号」(大正十五年五月一日)には、後の小説家、田中英光の自由詩「夜」が掲載されている。

三、児童自由詩における宮崎の子ども

(一) 東郷小学校・高森通夫

昭和に入ると、昭和三年三月、「第二十卷第三号」に高森通夫の「あの人」という作品が掲載されている。「推奨」である。

あの人(推奨)

宮崎県東臼杵郡東郷小学校尋五

高森通夫

私はあの人知つてます。
私が入院してる時、
一しよに入院してました。
私は退院したけれど、
まだ入院してました。

あの人、道を通るとき、
赤ちやんおぶつて通ります。
私を見ると笑ひます。
しづかにやさしく笑ひます。
ほゝは赤くてふくらんで、
やさしい顔をしてるます。

〔第二十卷第三号〕昭和三年三月一日

美しい詩である。「あの人」の笑顔だけでなく、優しい人柄やその裏にある生活などが彷彿としてくる。高森通夫はこの後も盛んに投稿を続け、数多くの作品が掲載されているが、詩としてはこれが最も優れている。

白秋は「選評」で次のように述べている。

高森君の「あの人」は材料として一篇の小品にもなる内容がある。それらをすらくと苦もなく歌ひあげてゐる。この内容はまた清純で

人に微笑を催さしめる。

「一篇の小品にもなる内容がある」とは、それだけ「あの人」のイメージが鮮明で、印象が強いということである。生活を背負った母親であり、同時に若い女性である「あの人」を、小学五年生でここまで描けるとは驚きである。

なお、この作品は、北原白秋編著『鑑賞指導 日本児童自由詩集成』（昭和八年十月 アルス）にも収録されている。これは「赤い鳥」の代表的な作品を編集したものである。

高森通夫の作品は、同年の「第二十卷第五号」（昭和三年五月）、「第二十一卷第三号」（昭和三年九月）にも掲載されている。

魚売り

宮崎市県立病院前谷口方（十三歳）

高森通夫

雨がやんだね、
魚うりが行くね、
四かくな籠に、赤いきれのせてね。

〔第二十卷第五号〕昭和三年五月一日

夏の思ひ出（佳作）

宮崎市県立病院前谷口方（十三歳）

高森通夫

白くけむつてゐる、
入り口の中で、
絵を描いたよ。

夕方に近い
かほらなか
河原の中だつたよ。

〔第二十一卷第三号〕昭和三年九月一日

高森通夫の詩は、いずれも柔らかい物言い、イメージ性が強い。

「魚売り」は雨宿りしていたのだろうか。雨が止んで動き出した魚屋の後ろ姿が目につかぶ。しかし「四かくな籠に、赤いきれのせてね」が天秤棒なのか、自転車の荷台なのか、よく分からない。当時はこれで十分「魚売り」の様子がイメージできたのかもしれないが、今となっては分からない。そこがはつきりしていれば、もつと雨上がりの様子が印象的になったのではないか。「赤い切れ」が鮮やかであるだけに、惜しい。「夏の思ひ出」が佳作に入り、「魚売り」が佳作になっていないのは、このあたりに要因があつたのかも知れない。

〔第二十二卷第一号〕（昭和四年一月一日）では、自由画の部門で高森露夫が「推奨」になっている。

*自由画「人物素描」（推奨自由画）

宮崎市県病院東門通（十五歳）高森露夫

山本鼎は「自由画選評」で、次のように評している。

「さて、批評にうつりますと、高森露夫君の『人物素描』（推奨主席）は、しつかりした、やはらかみのあるいゝデッサンです。殊に着物がよく描けてゐます。たゞ腰から脚にかけて小さすぎました。それは全体の釣合に注意して描かなかつたためです。」

更に「第二十二卷第二号」（昭和四年二月一日）でも「推奨」になり、絵が掲載されている。

*自由画「静物」（推奨自由画）

宮崎市県病院東門通（十五歳）高森露夫

*山本鼎「自由画選評」

「高森露夫君の『静物』（推奨主席）は色も美しいし、調子もいゝスケッチですが、今一步踏みこんで、調子を見てもらなさい。すると、あかるいまゝに、もつと罎もコップも、浮き出て見えるはずです。」

〔第二十二卷第三号〕（昭和四年三月一日）では、高森淳夫の絵が掲載されている。

*自由画「菊」（自由画）

宮崎市県病院東門通 高森淳夫

*山本鼎「自由画選評」

「高森淳夫君の『菊』は感じのいゝ水彩画です。たゞ図取りとしては、鉢の全体をとり入れてほしかつた。バツクの流したやうな絵の具は面白くない。」

雑誌に掲載された絵が白黒であり鮮明でないこともあつて、山本鼎の選評について云々することはできないが、注意を引くのは、いづれも高森姓であり、同じ住所であることである。高森通夫の「夏の思ひ出」と「魚売り」の住所も「宮崎市県立病院前谷口方」となっており、宮崎県立病院の近くである。高森通夫と高森淳夫は兄弟なので、高森露夫もあるいはそうなのかも知れない。高森通夫の兄は詩人の高森文夫である。いづれも「夫」がついていることから、その可能性が高い。詩と自由画の違いはあるが、兄弟そろって「赤い鳥」に掲載されているのである。

平成七年三月一日に出版された『宮崎県人名録』によると、高森通夫は長じて九州帝国大学医学部に進学し、開業医（皮膚科）になつて

いる。

高森通夫 高森医院院長

* 東郷町出身

* 大正五年十二月六日生まれ

* 延岡市三ツ瀬五の七（現住所）

* 学歴 昭和十四年（旧）宮崎中学校卒 昭和十六年（旧）松江

高校卒 昭和二十年九州帝国大学医学部卒 医学博士

* 国立病院勤務を経て昭和二十三年現在地で開業。

* 趣味 短歌

* 親戚 高森文夫（詩人）

（『宮崎県人名録』宮崎日日新聞社）

これはアンケート方式で本人に書いてもらったものである。大人になつてからは、詩ではなく短歌を趣味としていたようである。「親戚」のところが高森文夫を挙げ、「詩人」と付け加えているように、兄の高森文夫は第二回中原中也賞を受賞した『浚渫船』（昭和十二年）や『舷灯』（平成二年）という詩集も出している人である。明治四十三年東郷町に生まれ、延岡中学、成城高校を経て東京帝国大学仏文科に進学している。東郷町は山間部ではあるが、若山牧水を生んだ地でもある。それにしても当時の東郷町から東京の成城高校や松江高校に進学したりしているのだから、高森家というのは相当に裕福な家だったのだろう。

『東郷町史』別編（郷土事典）（平成十一年）によると、二人の父親である高森一郎（三代目為市）は県立延岡中学校を卒業しており、勉学には理解があつたと思われる。また地主でもあり、村会議員や森林組合長等を努め、功績があつたと記されている。いわゆる村の有力

者の一人だったようである。

高森文夫は後に故郷に帰り、旧制延岡中学校教諭等を経て教育長や町長を務めているが、高校時代に知り合った中原中也が何度か東郷町を訪れている。

中原中也全集（角川書店）には、『浚渫船』について書いた文章が収められている。

詩集 浚渫船

友人高森文夫の詩集、浚渫船が出た。僕が高森を知つたのは七八年前のことであるが、彼はその前から詩を書いて、日夏耿之介主宰の遊牧記等に発表してゐた。僕なぞまた何処にも発表しない頃のことだし、何れ高森の方が早く所謂詩壇に出るのであらうと思つてゐたが、遊牧記の後では、石川道雄主宰の半仙戯、其の後は友野代三主宰の童説といつたあまり世間の表てに顔を出したがつてゐない雑誌に発表するだけで、一向に其の他に発表はしつてゐないのであつた。一つには非常に寡作のせぬもあるのだが、「そつとしておいてくれ」といふ気持ちの強い男だといふことがその主な理由だと思ふ。

今度出て来た詩集をみると「浚渫船」とある。どういふつもりで付けたのかまだ訊ねてみないが、僕が勝手に想像する所では、無口でそつとしておいて貰ひたい男が、誰でも多かれ少なかれ感じてはゐても余りに底深い、流れだとして殆んど全く触れないで過ぎる態の非情を、人目にも立たず浚渫してゐるといつた風の心持であらうと思ふ。

高森は今宮崎県の中学で英語の先生をしてゐる。大学を出て一年ばかり郷里の日向で何をすることもなく暮してゐた。それから半年ばかり上京して牛込あたりの下宿にゐたが、就職口があつたんだと云つて宮

崎県に行つた。舎監になつたが、夜になると時々寄宿生の誰かが便所へ行く音がするきり何も聞こえないと此の間の手紙には書いてゐた。熊本へ出張して一と晩久しぶりで旅人の気分であつたが、熊本といふ所はいい所です、火山地方特有の落ち付がありますとも書いてゐた。僕は高森のことを想ふと、いつも一匹の美しい仔熊を連想する。今日も彼は紺の背広を着て熊のやうにしづく／＼と南国の夏の町を歩いているのであらう。(略)

高森文夫を「一匹の美しい仔熊」と比喩し、文末は「どうぞ此の奇特な詩集が、一冊でも沢山に売れるやう希望するものである。」と結んでいる。好意的な文章である。

子どもの頃、この兄の影響があつたのかどうかは分からないが、高森通夫が詩を書く背景には、こうした環境もあつたのである。なお、高森文夫は、兄弟の出身校である東郷小学校の校歌も作詞している。

(二)「赤い鳥」の休刊

高森淳夫の絵が掲載されたのは「第二十二巻第三号」(昭和四年三月一日)だが、「赤い鳥」はこの号をもつて休刊に追い込まれている。鈴木三重吉は巻末に休刊の辞をのべている。

私どもは「赤い鳥」の尊い使命のために、約十一年間、たえず奮闘して来ましたが、最早到底経済上の支持が出来ないので、この三月号を限り、一たん休刊して方策を立て直すことにしました。

「赤い鳥」の経営には、最初から財力的の後援といふものがありませんが、それで第一私自身は事務的に無給であり、執筆の方も無計算として働いて来ましたが、事務の方では最近一年来は、三名の記者を一名に減じ、二人分を私の負担に加へてゐるほどです。執筆の方面でも、

例へばこの号のごときも、四人の作家の童話以外のすべての読物は、その名前の人々から与へられた材料によつて、私自身がかき、又は与へられた原話を私がすつかりかき直したので、幼年読物ともに八つの話が、私の表現で掲げられてゐるのです。事務の中には、あの煩勞の多い綴方の選もはいつてゐます。私はこれだけのすべての努力を十一年間つゞけて来たわけで、時間としても、私の殆どすべての時間を捧げて来たのです。それで、最近五年間は、殆ど毎月欠損つゞきで、私一家の乏しい所得からつぎ足して、すでに総計三万円も注ぎ、最早この上投するあてがなくなつてしまひました。多くの熱愛者諸君は、休刊と聞かれて、定めし落胆して下さることゝおもひますが、普通の営利家だつたら、すでに五年まへにつぶしてゐたでせう。

ともかく、「赤い鳥」が迎へられないのは、他の一般の雑誌のそれと同じく、震災以来の不景気にもよるのでせうが、根本は私が宣伝下手であり、又、経費上宣伝が出来なかつたためもあるほか、もと／＼雑誌そのものが、あまりに高等なため、俗間の好みに向かないからでせう。つまり多くの家庭や学校が、児童の雑誌について考慮も選択もせず、全然児童のおもむくまゝに放任してゐる結果、俗悪な雑誌にのみ読者が集るのです。さういふ雑誌は、下等な媚と誘惑とを用ゐて、十五万、二十万、二十五万といふ部数を出してゐるのですから叶ひません。

「赤い鳥」がいよ／＼廃刊となれば、言ふまでもなく、最早、児童のために本当に許される雑誌が、日本に一つもなくなるのです。全日本の児童のためにこのおそろしい損失を考へると、身ふるひがします。

私どもは「赤い鳥」の運動によつて、はじめて眞の芸術家を児童の世界に迎へ入れ、純芸術的童話の普及と、新時代の童謡、作曲の創始と、自由画の開拓と綴方の根本的革新と、自由詩の発生とを寄与し、中では殆ど徹底的に誘導し得た部面もありますが、「赤い鳥」が亡びて

もすると全然指針を失つて廃滅しさうに思はれるのは自由詩であり、指導の中心がなくなる意味で、綴方の発達をも鈍くするかと気づかれます。それで「赤い鳥」をやめても、少なくとも、自由詩、綴方、童詩童謡とだけは、指導していきたいと思ひます。そのためには、御要求があるならば、作曲と自由画とを加へた小雑誌を発行してもかまひません。綴方では、最近に東京市教育課の懇請により、全市の小学校の綴方主任二百名あまりの人々のために講演会を開き、綴方なるものの根本の意義と指導法とについて、私の十年間の研究を傾けてお話をしましたが、かういふ点にも、私の時間の許す限り、各地方へも出張して奉仕したいつもりです。

(略)

要するに今後のすべてにつきましては第一に愛読者諸君と御相談申さなければなりませんので、貴名簿をこしらへておきたいと思ひます。お手数ながら、みなさまの御住所をはがきで御通知下さいませんてせうか。

「赤い鳥」が廃刊ときままりませば、お払込みの前金の残りは早速お返し申します。以上。

(第二十二卷第三号 昭和四年三月一日)

「赤い鳥」が休刊に追い込まれた事情が、縷々述べられている。もと鈴木三重吉個人の負担が大きかった「赤い鳥」だが、ここにもあるように、その成功を見て子ども向け雑誌が次々に創刊されたことも大きかったと思われる。既に、大正八年九月に、「赤い鳥」を模倣した雑誌が増えているとの投書が「通信」欄に掲載されている。

折角鈴木先生が御苦心の結果、産み出された「赤い鳥」の特色を、近來のやうに、あちらでも、こちらでも模倣し始めては、さぞ御編集

も困難の御こと、存じます。実際、あゝした模倣雑誌を臆面も無く出す当事者の気が知れませぬ。不真面目ともいへない(筆者注 一字抜け)唯、恥を知れと言つてやりたくありません。而も、みんな御尤もな理屈がついてゐるのでから恐縮の至りです。私もこんなことは申し上げたくもありませんから(鈴木先生にしてもそんなことを御耳にしたくもありませんでせうから)黙つてなりゆきを見てゐましたが、あんまりだといふ気がします。それにしても、益々「赤い鳥」が、模倣雑誌に刺激されてといふわけではないでせうが、内容外観共に新になつて、完成された芸術品を見るやうなのは嬉しうございます。これから後も、一層御奮闘下さいますやうに多くの愛読者に代つて御願ひいたします。(市外豊多摩郡戸塚町二三〇、金津政二郎)

(「第三卷第三号」大正八年九月一日)

「赤い鳥」の記者も「これに似た通信は、先月來幾十通も参ります、いろいろな意味で、この欄には掲載いたしませんで、唯皆さまの御好意を謝してをりました。」と書いています。

しかしここで注目されるのは、三重吉が『赤い鳥』が亡びでもすると全然指針を失つて廃滅しさうに思はれるのは自由詩であり、指導の中心がなくなる意味で、綴方の発達をも鈍くするかと気づかれます。」と述べていることである。児童自由詩を産み出し、活動の中心になつているのは「赤い鳥」だという自負が伺われる。また児童自由詩が「赤い鳥」の中においても中心的な位置を占めていたことが分かる。「自由詩、綴方、童詩童謡とだけは、指導していきたい」と言つた鈴木三重吉だが、昭和六年一月に「赤い鳥」は復刊されることになる。

(三)「赤い鳥」の復刊

く東白杵郡草川小学校の活躍く

この復刊第一号に、高森淳夫の「人物デッサン」が、特選として掲載されている。

※「第一巻第一号」(昭和六年一月一日)

「人物デッサン」(特選)

宮崎県病院東門通(十六歳) 高森淳夫

*山本鼎評

『人物』高森淳夫君画。形はしつかり描けてゐますが、蔭日向の見かたが足りませんね。だから、物を現した線が目立ちすぎて、うるさい感じを与へます。」

第一号であるから、復刊されることを知って、あらかじめ投稿したことになる。三重吉は「休刊の辞」に「貴名簿をこしらへておきたいと思ひます。お手数ながら、みなさまの御住所をはがきで御通知下さいませんでせうか。」と述べているから、恐らく高森兄弟の誰かが名前を登録しておいたのだろう。

驚かされるのは、次号、「第一巻第二号」の綴方選外佳作に早くも「宮崎園田米蔵」の名前が見えることである。しかも第四号には、草川小学校尋常四年金丸実、東郷小学校の高森通夫二人の自由詩が入選しているのである。高森通夫は「淳夫」の絵が一号に掲載されているのだから分かるが、草川小学校の子どもがこんなに早く投稿し、掲載されているのは驚きである。「園田米蔵」も草川小学校の生徒である。東郷小学校も草川小学校も同じく県北の東臼杵郡の学校である。東郷小に限らず、当時の東臼杵郡全体にそうした中央の雑誌へ子どもの作品を投稿するような教育的な気運が感じられる。

しづかな夜(佳作)

宮崎県東臼杵郡

草川小学校尋四

金丸 実

しんとした夜、
まつくらの夜、
たれも通らぬ
まよなかに、
お父さんのさけのむ
とうふかひに、
まあるいく
あかぜにを
五つもつていつたんだ。

(第一巻第四号 昭和六年四月一日)

人通りもなくなった夜道を使いにはやられる子どもの不安である。「あかぜに」とは、「赤銭(あかせん)」、つまり一銭銅貨のことだろう。丸い銅貨を五つ握りしめて、暗い夜道を緊張して行く姿が浮かぶ。

たこあげ

宮崎県東臼杵郡

東郷小学校尋六

高森通夫

たこあげに
川へ行ったが、
風が
すくなくて
一度しか上らず、

西^{にし}の空^{そら}
赤^{あか}くなつて、
人も馬^{うま}も
赤^{あか}かつた。
夕^{ゆふ}ぐれの
しづかな川^{かはら}原^{はら}、
砂^{すな}ふん^{ひより}で一人かへつた。
西^{にし}の空^{そら}はまだ赤^{あか}い。

(第一巻第四号 昭和六年四月一日)

高森通夫の作品は、いつもながら叙情性に満ちている。「しづかな夜」などが持っている子どもらしさを脱しているところがある。いわば、感性の人である。

この号には、他に、綴方選外佳作に「宮崎園田米蔵」「宮崎黒木進」の名前が見える。

「第一巻第五号」では、草川小学校の子どもたちが、綴方、自由画に、東郷小学校の二人が自由詩に入選している。

たこあげ (佳作)

宮崎県東臼杵郡草川小学校尋五

安田いまの

夕方私が、家のだんに腰かけて、ざつしを読んでゐたら山からかへつて来た弟が、つかれたと見えて、先づ服をぬいだ。一時がして弟が私に、「たこあげに行こかい。」と言つたので、私はざつしを下に置き、「いやど。おれや、なまよだき。」といふと弟は、

「なんとね。ちよいとぢや。」と言つてふと思ひ出したのか、ポケツトに手を入れた。

「おゝ、ほんに、きりあめ、やつど。」と言つた。私はほしかつたので、「そんならいくわ。行つたな、すべ、いんでくや。」と言ふと、よほど、たこあげたかつたのだらう、「おゝ、いたな、すべいんでくるわ。」と言つたので、さつそくたこを持つて出かけた。弟が、

「そこん、えんにある、よまを持つてけ。」と言つたので、板ばにまいた、よまを持つて行つた。きどに行くと、風がふかないので、私が、

「風は吹かんがや。」と言ふと弟は、
「いとぢやが。よこえは吹きよつとぢやが。」

「なんが吹くもんか。あすこもこゝも、やつば、同じぢや。」
と言ふと、

「だまつちよれ。よこえは吹きよつとじや。」とおこつたので私はそのまゝだまつて、弟の後をついて行つた。

よこえに行つて見ると、なるほど弟の言つたやうに風は吹いてゐた。吹くと言つてもそんなに吹かない。年光さん方の前を通ると、私たちが話し声が聞えたのか年光さんもたこを持つて来た。そして、

「おりも、あぐるわ。」と言つたので弟は「おゝ二人であげやね。」と言つて二人で仲よく上げることにした。年光さんのたこは作つたたこです。それでも上ると言つたら、買ったたこぐらゐは上る。年光さんのたこは朝日のたこです。弟のたこは兵たいさんのかいてあるたこです。その兵たいさんは胸にくんしようをつけて、ゐばつてゐる。

年光さんは東の方の道から上げて来た。弟はそのゐるところで上げた。上げてゐるさい中に私の家によられた川内の服やさんが、来られたので、年光さんのお父さんが「年光。」とよばれた。けれども年光さんはどうしてもきゝません。なんぼよばれても行かないので、年光さんの兄さんが出て来て「年光、早よ行かんか。服を買つてやらつと

ぢやが、いらんかの。人はみんな持つちより、わりやもたんどがや。」と言はれた。年光さんはたこを私にもたせて、走つて行つた。

ちようどよいのがなかつたのだらう。又こへ走つて来た。私が持つてゐるたこを取つて又たのしく上げだした。服やさんは、きどに出で来て、じてんしゃに手をかけて、弟のたこが下へ下りようとするのを見て、

「こりや、ぼくぢや。」と言はれた。その服やさんは家の兄さんと仲よしです。服やさんは、じてんしゃにのつて、くぼの方に行かれた。弟のたこは上がらない。年光さんののは高くく上る。

「ほら、上らんがや。おいさこのが、なんぼかいゝかつたわ。今から、おいさこに行こかい。」と言ふと弟は、

「ばか、ほこのが吹くとぢや。」と言ふたので私は「なんと。」と言つたとき、その後を言ふと又けんくわになると思つて、そのまゝだまつて、持つて来たよまをにぎつてゐた。弟の手も私の手も赤くなつてゐた。

年光さんがあまり上るので、私が持つてゐたよまきを年光さんについだ。そしたら、弟のたこはなんぼ上らせても上らない。長らくの間、弟と年光さんはそうしてあそんでゐたが、もう夕方になつたので弟は、

「もういのや。寒かり。」と言つたから私は「うん。」と言つて、たこを、まくじりにかゝつた。年光さんのはすぐ下すことが出来たが、弟のは私が下したので、竹やぶに引つかかつた。

それを下すのに長い間かゝつた。私は、竹が、からだにあたつたり、目につきあたつたり、かほにあたつたりして、いたくてたまらない。さうしてやつととつた。弟は年光さんの兄さんがそこに来られたので、ゆたちなかけについて行つた。たこは私が持つてかへりました。かへるときにはもううすぐらかつた。かへる道、弟からもらつたきりあ

めをたべてかへつた。家にかへつて、ゆるりのはたで、安らかに火をぬくんで、それから夕ごはんをたべかゝた。

(第一巻第五号 昭和六年五月一日)

筆者注 雑誌では全ルビ付きだが、わずらわしいので、取つた。

文章の横に、方言に対して注も付いている。

当時の子どもは、よく遊んだようだ。高森通夫の「たこあげ」にしても、この子の綴り方にしても、陽が落ちるまで遊んでいる。作者は家に「かへるときにはもううすぐらかつた」と言っているのに、弟はそれから「ゆたちなかけ」に付いていつている。本文では「ゆたちなかけ」の横に「いたちをとるわな？」と疑問符の注が付いている。

鈴木三重吉は選評で、次のように評している。

*鈴木三重吉選評

安田いまのさんの「たこあげ」も、対話が方言的ですが、これも、よく味ふと、その対話そのものによつて、少し、きかない気の、がつちりした弟さんの人物と気分の動きとが陰影的に活写されてゐます。弟さんが、最初に、たこ上げにいかうと言つて、さそひをかけるところから、出かけるところまでのところや、うら口へ出て、風のあるなしについて言ひ争ふところや、おとうとさんのがあがらないので、場所をかへようと言つて又争うところなど、すべて対話のところは、よく実感が出てゐます。子供といふものゝ活きをどつてゐる佳作です。しまひに弟さんが、いまのさんに尻をもたせてかへし、じぶんはよその人がいたちのわなをかけるいくのに、くつついていくといふ、あれだけの事実にも、子供の生活の或ものが、をどり出てゐて微笑される

ではありませんか。

三重吉の言うように、子どもの生活、子どもそのものが実感できる作品である。少々方言が強く、「赤い鳥」の読者一般には分かりにくかったのだろう。注が付けてあるが、これについては後に、指導者の方で注を付けてくれと三重吉は言っている。

なお、この綴り方は四番目に掲載されているが、三重吉の評価が高かったらしく、「たごあげ（綴方） 鈴木三重吉選」と、綴方欄の表題になっている。

自由詩では、東郷小学校から高森通夫と奈須吉夫の二人が入選している。

かなしいとき

宮崎県東臼杵郡

東郷小学校尋六

高森通夫

かなしく思つてるとき、

まへのひの木は

すこしゆれてゐた。

雨で黒くしめつてゐる。

松の木も、もみぢの木も、

みな何か考へてゐるやうだ。

すこしもうごかずに。

（第一巻第五号

昭和六年五月一日）

雨あがり

宮崎県東臼杵郡

東郷小学校尋六

奈須吉夫

島のごぼうの葉に

まだつゆがのこつてゐる。

目白がひくゝとんで行つた。

雨あがりの朝はしづかだ。

（第一巻第五号

昭和六年五月一日）

「雨あがり」は島のごぼうの葉の露と目白を組み合わせ、最後に感懐を述べるといふ「赤い鳥」らしい構成だが、高森通夫の「かなしいとき」は、写実的でありながらそこに自分の感情、抒情を盛り込むという自分自身の詩の世界が成立している。高森通夫は、宮崎の子どもたちの中にあつては、希有な存在と言えよう。

自由画では、草川小学校の金丸道雄が特選に入り、掲載されている。運動場の隅に、五本の木の真ん中に国旗が空高く翻っている。その左に奉安殿とおぼしき建物が建っているという構図である。

*自由画

「国旗と奉安殿」（特選） 金丸道雄

宮崎県東臼杵郡草川小学校尋四

*自由画選評 山本鼎

『国旗と奉安殿』（特選） 金丸道雄君画。旗と立木がよく出来てゐる。旗は風でうごいてゐるおもむきが出てゐるし、立木はまるみが出てゐる。空はまづい。クレイヨンをもつとかるく使つて描きかさねて、深い空色をだす工夫をしなければいけない。これでは線が目立ちすぎてさわがしく、ためにほかの景物が活きなくなつてしまふ。」

参考までに述べると、この号には新美南吉の「窓」といふ童謡が

「新美正八」という本名で載っている。これ以降、新美南吉の童謡は数多く掲載され、昭和六年十一月の「第二巻第五号」では、童話「張紅倫」が掲載されることになる。

窓

愛知県半田町岩滑 新美正八

窓をあければ

風がくる、風がくる。

光つた風がふいてくる。

窓をあければ

こゑがくる、こゑがくる。

遠い子どものおゑがくる。

窓をあければ

空がくる、空がくる。

こはくのやうな空がくる。

それにしても、東臼杵郡の活躍は目立つ。東郷小学校は殆ど高森通夫の一人舞台だったので個人的な投稿かと思われるが、新しく奈須吉夫が登場し、指導者がいたのかも知れないと思わせる。昭和五年当時の職員録を繰ってみると、次のようなスタッフである。

東郷尋常高等小学校 児童数 五四五

学級数 一四

学校長 一〇〇 木村誠三郎

訓導

八〇	塩月儀一
六〇	河野武俊
五三	外山末士
五〇	松浦正保
四八	河崎清政
三八	興梠八重子
三八	野崎一枝
三八	茂野春枝
三三	門田豊
三三	富高藤三郎
三〇	福谷ノブ
四三	清水義美
三五	田村キヨコ
五	成合マツ

専訓

このうち誰が指導したのかは分からないが、訓導筆頭の「塩月儀一」は県地方史研究に名が見える人物である。例えば昭和五十五年度「宮崎県地方史研究紀要 第7輯」(宮崎県立図書館編集 一九八一、一〇)では、「若山牧水と坪谷」という論文を書いている。したがって、あるいはこの塩月儀一の指導かとも思われるが、今のところ確証はない。
高森通夫は「第一巻第六号」(昭和六年六月一日)にも特選で自由詩に入り、佳作にも選ばれている。

午後 (特選)

宮崎県東臼杵郡東郷小学校尋六

高森通夫

学校からかへつて、
 ごはんをたべて出たよ。
 かち栗をかじつて、おうかんに出たよ。
 弟をつれて墓に行かうと思つて。
 おうかんは白い、ずうつと白い。
 午後、
 向うで友だちが石ゆみ引いてる。
 こちらむいて笑つた。

〔第一巻第六号〕昭和六年六月一日

「あの人」もそうだったが、友だちの笑顔が極めて印象的である。「こちらむい」た友だちの笑顔が鮮やかに浮かんでくる。「おうかんは白い、ずうつと白い。」も、「おうかんは白い」ではなく「ずうつと白い。」とすることで墓への距離感を出し、静寂さを感じさせる。

北原白秋は、選評で、この詩について次のように述べている。

* 白秋選評

高森君の「午後」は学校から帰つたあとの生活の一端がよく示されてあります。こんなことは誰も経験することゝ気にとめないでゐる。御飯をたべてからかち栗をかじつて往還へ出る、弟をつれて墓へ行かうと思つて出る、白いずうつと白い往還が見える。向うで友だちが石弓を引いてゐる。これだけです、なかなか印象がはつきりしてゐます。少年の世界がよく見えませう。

やはり、印象的だと言っているが、高森通夫の作品はイメージがは

つきりしているのである。佳作は「昼の月」という題である。

昼の月（佳作）

宮崎県東臼杵郡東郷小学校尋六

高森通夫

学校からかへるとき
 見たよ、
 白い大きな月を。
 山の木立のそばに
 半分はきえて、
 昼の月はうすいな。

〔第一巻第六号〕昭和六年六月一日

山村暮鳥は詩「風景 純銀もぞいく」で「やめるはひるのつき」と詩つた。

いちめんのなのはな
 いちめんのなのはな
 いちめんのなのはな
 いちめんのなのはな
 いちめんのなのはな
 いちめんのなのはな
 いちめんのなのはな
 いちめんのなのはな
 やめるはひるのつき
 いちめんのなのはな。

〔風景〕第三連

一面の菜の花畑の上に出ている昼の月、それは「病める月」だとい
うのだ。小学校六年生の高森通夫も、昼の月に視線を注いでいる。
「半分は消えて、昼の月はうすいな。」というのは、病的とまでは言っ
ていないが、暮鳥に通じるものがある。

この号で注目されるのは、後に取りあげる生活綴方教師・木村壽が
童謡を投稿していることである。

「童詩童謡選外佳作 ○木村壽」

とある。残念ながら選外佳作なので、どのような作品だったのか知る
ことが出来ないが、生活綴方からのみ評価されがちな木村壽に、この
ような面があつたことは注目に値する。

「第二巻第一号」(昭和六年七月一日)では、「綴方選外佳作」に
「○宮崎松林馨」が入っている。

「第二巻第二号」(昭和六年八月一日)には、旧制宮崎中学校(宮
崎市)に進学した高森通夫の自由詩「雨あがり」が特選になっている。
また、草川小学校の黒木進が綴方「がにとり」で佳作に入っている。
黒木進は「第一巻第四号」(昭和六年四月)で、園田米蔵と共に選外
佳作になっている子どもである。

綴方選外佳作に、「○宮崎松井しずゑ ○同金丸すま子 ○同園田
半蔵 ○同黒木ひさの」の四名が入っている。園田半蔵は園田米蔵の
誤植である。

雨あがり(特選)

宮崎県宮崎中学校一学年

高森通夫

雨あがり、しつとりと、
みなふくれてる感だ。
なにもかも紫いろだ。
風がなく木々はみなしづかだ。
ぼとりと一直線に、
びわの葉がおちた。
夕暮れの日。

(第二巻第二号) 昭和六年八月一日

*白秋の選評

高森君の「雨上り」には雨上りのふくれてる感じ、紫色、さうし
た清新さの中にその感覚を磨いて鋭く鋭く張りつめて行つてゐます。
ぼとりと一直線に枇杷の葉がおちた、その一直線が際立つてゐます。

これは北原白秋の評に尽きる。雨あがりの紫色、ぼとりと一直線に
落ちる「びわの葉」、びわの葉の重さと、辺りの静けさを見事に表現
している。

なお、高森通夫の「午後」と「雨あがり」は、北原白秋著『指導と
鑑賞 児童詩の本』(昭和十八年四月十五日 帝国教育出版社)に採
録されている。

がにとり(佳作)

宮崎県東臼杵郡草川小学校尋六年

黒木 進

僕はこの前の日曜日に、がに取りにいきました。一人で、味噌こしと、がに突をにぎつて海に向つていくと、ちよつとした、たんぼりの中に、がにのぬけがらを見つけた。そのそばに石がある。その石のまはりが、にごつてゐたので「がに、をつとちやうらう。」と思つて僕はそつといつて、がに突で、にごつてゐるところをついた。すると、がじりと言つた。がに突を上げると、トハタリガニがさゝつてゐる。がには痛さうに足だけ動かしてゐる。僕は早く味噌こしに入れて海にはいつた。

僕のゐる、まはりの水の中に、たくさん藻が生えてゐるので、水の中は暗いやうになつてゐた。そして、ギユギユウが足をさすやうにある。沖に出るとつよし君に会つた。立ちどまつて「こら、がにつきをかせ。」と言つたので、もつていつて貸すとワタリガニを取つて僕にやつた。それからギユギユウがさすやうなところがにをふまうとした。あちらこちらさがしてゐると、一つ何かふんだので、とまつて足でなでて見ると、まはりに、かにのけんや足のやうなものがあつた。がに突を下の方にまはして突いたら、がじりと言つた。僕は「がにぢやらう」と思つてうれしかつた。がに突を上げて見ると、ワタリガニの小さいのであつた。足を動かしてあばれるのを、上から手を出してつきはづした。それから東の方へいくと武義君、宗四郎君、政市君たちが、がにをとつてゐた。宗四郎君は、すてごに、イガに、カガンベをとつてゐました。僕は「宗四郎、わりはそんがには、どこじ取つたか。」と言ふと、陸の方を指さした。僕が陸の方を見ると少し藻がかわいてゐるところがあつた。「こりか。そこん、ちつと、ひやがつたところがあるどが、そこじ取つたちか。」と僕は言つた。

それから僕たちが藻の中を歩いてゐると、義夫君、茂君、さとし君たちが来ました。義夫君たちも一しよに藻の中を歩いてゐると、僕が、

がにをふんで、取つた。すると義夫君たちが来て「やつたが〜。」と言つて僕のそばであばれたり、ませくつたりして僕がにをつくの妨たげる。そのとき指のまたの間から、がに突でつくと、がじりと言つた。「がにをちた。」と思つて上げて見ると、がにのはきみだけであつた。「義夫どみが、あばれたかり、え突かぎつた。」と思つておこつた。「なになるか」と言ふと面白がつて「せつべ、進がときはあんげすや。」と言つた。僕は義夫に、何とか言うたな、はらがたつわと思つたが、だまつてゐた。

僕が歩つてゐると、政市君が、おどろいたやうに「来て見よ、がにをふんだ。」と言つた。宗四郎君がいつて突いたが、足をかみつかれたのだらう。「あいた〜。」と泣き声で言つた。みんながわつと笑ひ出した。すると政市君は足を上げた。もうそのときはがにには逃げてゐた。政市君は顔を赤くして「今んとはイガニぢやつたわ。」と言つた。それから後、もどつていくと、僕は石のやうな固いものをふんだ。僕はあばつて「こら、イシガニふんばへた。」といふと、みんな来て。僕はがに突で力一ぱい突いたが、さ〜らい。みんなは目をまるくして見てゐた。僕は宗四郎のがに突でついたが、さ〜らいので、宗四郎につかせたら、がにつきの竿が、へよつて、がじりと言つてさ〜つた。僕はそれを見てをどり上げるほどうれしかつた。引き上げて見ると大きなイガニであつた。さとし君が目をまるくして「いつちいが。」と言つた。(ををり)

(第二巻第二号) 昭和六年八月一日

* 鈴木三重吉選評

最後の六年生の黒木君の「がにとり」も、くつたくのない、子どもの生活の一面が展開されてゐて愉快です。しかし作としては全篇的に叙写に陰影が少いのが恨みです。たゞかにをつくつたびに「がじり」

と言つたといふあの「がじり」はいかにも大きなかにの甲羅をつきさすときの実感が活き出てゐます。「宗四郎、わりはそんがには、どこじ取つたか。」や「こりか。そこん、ちつと、ひやがつたところがあるとが、そこじ取つたちか」などの方言的対話語はいづれも実さいに声の色まで聞えて、その場面の実況が生き浮んで来ます。せつかく、かにをみつけたところをみんなにまぜかへされておこり出すところは実際の気持がよく出てゐます。なほこの作には方言の分らないのが多くてこまりました。人に聞いてほしいぶ註解しておきましたが、とうとう分らないのもありました。このつぎからは極端な方言へは受持の先生が附註しておいて下さるやうにおねがひします。

鈴木三重吉は「子どもの生活の一断面が展開されてゐて愉快です。」と評価している。「がにとり」にしる「たこあげ」(安田いまの)にしろ、子どもの生活がしつかり描かれている。「綴方は生活の記録である」と考える鈴木三重吉である。こうした地方の子どもの生活を描いた作品は、まさに意にかなうものだったに違いない。

「児童のいきた實際生活の上の、直接の経験、直接に見たこと聞いたこと、事実について感じたことをかかせるのでなければ教課として効果が上らず、ぴちぴちした具体の事象を扱わなければ牽引のある、真実な作品は得られない上に、製作の快味もないことを指摘したのである。」

(鈴木三重吉『綴方読本』後章「一 題材と課題」)

「児童のいきた實際生活の上の、直接の経験、直接に見たこと聞いたこと、事実について感じたことをかかせる」のであれば、どうしても生活語である方言が多くなってくる。共通語で書いていたのでは、

田舎の子どもの生活実感は出て来ない。指導者は鈴木三重吉の考える綴方論に従つて指導したのだから、三重吉には少々分らなさ過ぎたやうである。むろん、「極端な方言へは受持の先生が附註しておいてくれ」というのだから、方言を否定しているのではない。註解にも限度があるから、そちらでやっておいてくれと言つてゐるのである。この評に、草川小学校の指導者は恐縮したらしく、「赤い鳥」宛に手紙をよこしている。それが次号に掲載され、おかげで、草川小学校で精力的に指導してきたこの教師の名前が判明する。平田宗俊である。

▽鈴木先生、御健康はいかゞでございますか。「赤い鳥」のために献身的努力をはらつて下さる先生の御心情に心から敬意を表してゐる一人でございます。昨年、校長さんから「赤い鳥」の復刊を聞きさつそく入会させていただいたのです。毎号の上品さ、明るさには感銘の外はありません。先生の御努力の表れとのみ思つてをります。私等はその尊い御努力にどうかしてお報いせねばならないと思つてゐます。沢山の綴方の、字の汚い文を一々味ひ読んで下さる先生の御苦労も一通りではないでせう。全く頭が下ります。本校では五月号に安田さんのが入選し八月号では黒木君のが入選となり、ごほうびをお送り下さいまして有難うございました。重ね々々喜びに子供たちはいきいきしてまゐりました。私も献身的に「赤い鳥」のために尽くしたいと思ひます。黒木君の文中に沢山方言がありましたので、先生に対して済みませんでしたが、「たんぼり」は水溜りです。「ワタリガニ」はトハタリガニ(学名がざみ、海がに)。「すてご」は網をすく糸で編んだか。「イガニ」はトハタリガニに似てゐます。「カカンベ」は真珠貝(あこや貝)の小さいのです。「がにをちた」はがにをついた。「なになるか」は、そんなことをして何の役に立つかの意。「イシガニ」はイガニと

も言ひます。「へよつて」は曲つて。「いつちいが」一番いゝぢやないかです。何卒今後も御鞭撻御指導下さいませ。

(宮崎県東臼杵郡草川小学校、平田宗俊)
(第二卷第三号) 昭和六年九月一日)

丁寧な礼状である。草川尋常高等小学校は、当時の「東臼杵郡門川村」にあつた現・門川町立草川小学校である。昭和五年五月発行の『宮崎県学事関係職員録』によると、平田宗俊は全訓導の真ん中より少し上に位置している。

昭和五年		昭和六年	
草川尋常高等小学校	児童数 五〇三		四八四
	学級数 一一		一四
学校長	九〇 吉田 平助	渡辺 糸治	
訓導	七〇 田中 政治	田中 政治	
	五八 加藤 亮一	加藤 亮一	
	五五 戸高 汀	戸高 汀	
	四八 新田 次男	平田 宗俊	
	四五 平田 宗俊	平田 宗俊	
	四三 平田 喜美子	平田 喜美子	
	四三 酒井城太郎	柴田 清一	
	四三 奈須はるか	三浦ユキコ	
	四〇 動八柴田 清一	石川 茂夫	
	三八 三浦ユキコ	宮永 クニ	
	三五 石川 茂夫	甲斐 為蔵	
	二八 宮永 クニ	准訓 山村 晴雄	
	月二 甲斐 為蔵	代用 道久 保	

草川小学校の校長は、昭和六年版『宮崎県学事関係職員録』では渡辺糸治となつてゐるが、平田宗俊は「昨年、校長さんから「赤い鳥」の復刊を聞きさつそく入会さしていたのです。」と言つてゐるから、「赤い鳥」の復刊を教へてくれたのは吉田平助である。平田宗俊が綴方や児童詩教育に興味を持ち、熱意を持つてゐることを知つていて、復刊と共にいち早く知らせてくれたのであろう。

前述したように、「赤い鳥」の復刊第一号は昭和六年一月一日の刊行である。この「第一卷第一号」に高森淳夫の「人物デッサン」が特選として掲載され、「第一卷第二号」(二月一日)の綴方選外佳作には草川小学校の「園田米蔵」の名前が見える。そして第四号には、草川小学校金丸美、東郷小学校高森通夫二人の自由詩が入選している。したがつて校長の吉田平助は「赤い鳥」が復刊されてから平田宗俊に教へたわけではなく、復刊されることをあらかじめ知つてゐたこととなる。どのような経路から知つたのかは定かでないが、吉田平助自身「赤い鳥」に興味関心がなければ、気づくことも、復刊を平田宗俊に伝えることもなかつたであろう。東郷小学校の例を考へても、当時の東臼杵郡にそうした情報が伝わるような「赤い鳥」をめぐるつながりがあつたのだと思われ。

平田宗俊にしても、校長から復刊を聞いたのでさつそく入会したと言つてゐるのだから、それ以前に「赤い鳥」に関心を持つていたはずである。平田は昭和四年に宮崎師範学校本科第一部を卒業し、最初に赴任したのが草川小学校であるから、教育的な立場から「赤い鳥」に関心を抱いたのは、師範学校時代か赴任してすぐである。師範学校の生徒であれば「赤い鳥」を知つてゐたとしても何ら不思議はないが、もう一つ考えられるのは、父親の影響である。前述したように、大正九年十月「第五卷第四号」に初めて美々津小学校の綴り方が掲載され

た。当時の職員録を見ると、美々津小学校訓導の筆頭に「平田宗績」の名がある。一字違いということでも分かるように、平田宗績は平田宗俊の父親である。平田宗績が美々津小学校での綴方の指導者であったかどうかは分からないが、「赤い鳥」入選のなどを宗俊に話していたことは十分考えられる。それに、前述した岩屋ヶ平尋常小学校の校長であった牧野實作が後に勤務したのが第二富高尋常高等小学校であるが、その時の校長が平田宗績なのである。昭和五年のことである。この二人と平田宗俊との間に、「赤い鳥」が話題になったことも、考えられることである。

また、草川小学校においても、平田宗俊だけが綴方や児童詩の指導をやっていたわけではない。平田宗俊は後に『きょうも旅ゆく 続・力いっぱい』の記録（昭和四十八年二月）という小冊子を自家版としてまとめているが、その中に、「作品合評の日」という昭和六年に書かれた文章が再録されている。五月雨の降りしきる土曜日の午後、二年生の教室で行われた作品合評会の様子である。

午後二時、三ツ鐘は鳴った。
五分とたたないうちに、二女教室に十一の頭がそろう。校長は国史講習会に、女の先生二名は託児所に、都合三名は留守だ。校長が欠けていることが、ちよつと頼りない。

十一の頭は円陣をつくった。各先生の前には草川文苑（学校文集）が開かれている。

こういう雰囲気では合評会は始まっている。草川小学校には「草川文苑」という学校文集があったことも分かる。その草川文苑の前に、まず、子供の綴方に対する男女各担任教師の説明が行われる。この日は三年生の作品が対象である

沈黙寸時。主任は口を切った。

三年の学級担任は立って、作品を一つ一つ朗読した。「けさ」「ほたる」とり、「失題」という順に、D君は落ちついた口調で終った。

そして、作者（子ども）のことについて、簡単に語った。

「けさ」この子供は性質温良、算術よりも読方に興味を持っている。常に比較的長い文を綴って来る。

「ほたるとり」学級成績上の部であるが、綴方はそう上手ではない。だが、ひよつとするとうまいものを綴って来る。

「失題」学校成績は中の下。算術はほとんど駄目。思ったことは何でも書きつらねる。粗雑な性質である。綴方は読みにくい平仮名ばかりである。したがって文中の漢字は、教師の手で直してある。

次に三女担任が受け持ちの子どもの作品を同じように説明したあと、あらかじめ配られた紙に「男女別一席・二席」と思う作品を書いて、全員で投票するのである。主任の手で黒板に結果がまとめられたあと、批評に移っている。それについては省略するが、合評会の在り方をめぐる問題にまで波及して、活発な意見の交換が行われたようである。

平田宗俊は「本年度（昭和六年）隔月毎に、『綴り方の各方面に亘る指導』という題目で、継続研究を命ぜられている」（『力いっぱい』の記録）とも書いているから、中心的な役割を担っていたようではあるが、その背後には草川小全体での取り組みがあったのである。

そのためもあってか、「赤い鳥」復刊後の草川小学校の活躍は目覚ましく、選外佳作を含めると、かなりの数の子どもたちが投稿し、掲載されている。この号（第二巻第三号）では、自由画にも草川小学校の子どもの絵が選ばれている。

*自由画

「子守」 宮崎県東臼杵郡草川小学校尋四 田中義男

*山本鼎評

「田中義男君画。小さな紙片のクロツキイですが、子守の姿態を軽妙にとらへてあります。」

その他の選外佳作は、次の通りである。

▽綴方選外佳作 ○宮崎朝倉みどり ○同小川ひろえ

▽自由画選外佳作 ○宮崎請關武芳 ○同右松雪美

○同大下道夫 ○同大森哲夫 ○黒木勝

○同金丸道雄 ○同中田敏夫

○宮崎染田圓治

「第二巻第四号」(昭和六年十月一日)では、草川小学校の松井シズ工が綴り方で佳作に、四人が綴方選外佳作、一人が自由詩選外佳作に選ばれている。

▽綴方選外佳作

○宮崎右松ユリ子 ○同園田米蔵

○同朝倉ミドリ ○同黒木トメノ

▽自由詩選外佳作

○宮崎中田アキノ

牛の子(佳作)

宮崎県東臼杵郡草川小学校尋六

松井シズ工

学校の門を出た。やがておやすをばさんの家のきどへ来た。私とみんなどきようならをして、たんぼ道を通つて、すこしさを上つて行くくと、家のおばあさんがきどへ出てゐて、「だい、よい、く。」と向

うの方をむいて、しきりにさげんでゐられた。

私は何ごとかと思つて、「なんの。」言ふと、おばあさんは私の言つた言葉をほつたらかしておいて「あら、だいをちさんちやろうが。」と指さして言はれた。おばあさんは目がよく見えない上に、だいをちさんのをられるところは遠いので、はつきり、だいをちさんといふことはわからない。私はだいをちさんと云ふことを知らせておいて家へかへつた。家へかへつて見ると、思ひがけないことにおどろいた。今まで腹が大きかつた牛が、急に悪くなつてゐた。家には守をちさんや、ほかの人たちが、二三人きてをられた。

すぐに本をおろしておいて、牛小屋にいつた。牛は苦しさうにねてゐた。さうして、苦しいいきをして、目をつむつたり、あいたりしてゐる。そのやうすはいかにもかはいさうである。お父さんが、

「よんべ、まるでにひつばつていたつちやが、そしたな、橋がぐわつたつたが、ありたまがつて、とび上つたつちやが、ちりが、おけたつちやねが知らんわ。」心配さうな顔をして言はれた。

やがて、おばあさんが、だいをちさんをつれてかへつてこられた。だいをちさんはきどの方から、

「どんがらこつかい。」と言ひながらこられた。おばあさんは、牛小屋をのぞいて、心配さうな顔で、

「おりやも、知らんどへ。見ちやをらん。」といつて向うの方へいかれた。やがてお父さんが、「きゆうひよかつと、ちゝが大こなつたつちやが。」といはれた。ちゝが大きくなると子がうまれるのです。私は子をうむとき、死にはしないかと心配して、いつまでも家へをつた。するとお父さんが、

「わりや、はよ、子守にいかんか。いま、いも植ゑぢやから、せわしとど。」と言はれたので、ほんとうだと思つて出かけた。

おきまをばさんの家へいつて見ると、だれもゐなかつた。どこも

こゝもさがしてまはつたが、をらない。私は牛が心配になるやら、書方を書かうと思つてかへり出した。かへるとき、ちようど、あきのさんが、私の家へあそびにいく途中でした。それでいつしよにかへつた。かへつて見ると、家には大せいの人たちがきてゐなさいました。牛を買ふばかりようさんもきてゐて牛を見てやつてゐなさいました。私がいつてみると、牛が子を生みかけてゐた。おばあさんが私に、

「わんだ、見るもんじゃねど。」と言はれたので、足をあらつて書方かきにとりかゝつた。やがてするとつぜん、ばかりようさんが、「あゝ、うなめじや〜」とさげばれた。それといつしよに、をとなの人の口から「うなめじや、うなめじや。」「酒を一しゆ、とらんならんど。」といふこゑがきこえた。私はうれしくて、むねがどつた。

(第二巻第四号「昭和六年十月一日」)

「うなめじや」は「雌牛だ」の意味である。「うなめ」は雌牛のこととて、広辞苑にも載つており、方言というわけではない。

鈴木三重吉は、次のように選評で述べている。

*鈴木三重吉選評

つぎの尋六の松井シズエさんの「牛の子」では、はじめの方の、おばあさんが門口へ立つて、「だいさん」といふをぢさんの来るのを、いら〜としてまちうけてゐられる光景が、目に見るやうにうかんでゐます。つぎにおばあさんが、牛小屋をのぞいて、心配さうな顔をして「おれや、もう、しらないぞ。見てはゐられない」と言つて向うへいかれるところも、短い対話語をとほしておばあさんの気持や表情までが、まぎ〜と活写されてゐます。以下、お父さんが「われや、はよ、子守にいかんかい。いま、いもうぢちやから、いそがしんだぞ」といはれたり、おばあさんが「おまいなどが見るものぢやないよ」といつ

てシズエさんを立ちのかせられる、あの二つの対話語も活き〜してゐます。めうしだ〜、一升買へよと、よろこぶのは、めうしは子をうむので、をうしよりは価値が多いからでせう。全篇にわたり、すべての人々が、牛の症状について心配し、お産だと分つて、また気をもみ、いよ〜安産でよろこび合ふ気持が、よくうかび出てゐます。

昔の農家にとつて、牛や馬は大事な労働力だった。そして子どももまた、大事な労働力だった。「わりや、はよ、子守にいかんか。いま、いも植ゑちやから、せわしとど。」と言はれたので、「ほんとうだと思つて出かけた。」というところに、家の仕事をするのは当たり前という、当時の子どもの考え方があつた。子どもも家を支える一員であり、だからこそ家の経済を左右する「めうし」の誕生に胸が躍るのだらう。「第二巻第五号」(昭和六年十一月一日)には、高森通夫の自由詩「雨の朝」が佳作に入つてゐる。

雨の朝(佳作)

宮崎県宮崎中学校一学年

高森通夫

雨の朝、乾物屋の屋根の鳩、
黒く見えるよ。
胸をふり〜歩き出した。
二羽仲よくならんだ。
瓦が白く光つて、
うろこのやうだ。
鳩は飛び去つた。
隣からうすい煙がのぼるよ。

〔第二卷第五号〕昭和六年十一月一日

綴り方と児童詩の違いもあるだろうが、松井シズエの「牛の子」に比べれば、高森通夫の詩は、生活における経済性とは無縁である。乾物屋の暮らしではなく、屋根の鳩に目が行く。「うすい煙」も暮らしの煙ではない。写実としての情景を作るための煙である。高森通夫には、自分の作品に「詩」としての意識があったのだろう。

〔第二卷第六号〕(昭和六年十二月一日)には、「綴方選外佳作」に中田勝義、高橋花子、高橋久子の四人が入っている。

翌年の「第三卷第一号」(昭和七年一月一日)では自由画に草川小学校から二人選ばれ、山本鼎の選評を受けている。

*自由画

「えぞぎく」宮崎県東臼杵郡草川小学校尋四 柳田君子

「えぞ菊」(特選) 宮崎県東臼杵郡草川小学校尋四 西谷ミヤ子

*山本鼎 自由画選評

「えぞぎく」(特選次席) 西谷ミヤ子さん画 花がよく実写してある。バツクの描き方が ちときたない。」

「えぞぎく」柳田君子さん画。大まかな、やはり味のある写生で西谷さんのとちがつた美しさがある。生花のもつ水々しい感じはこちらが出てゐるが、少し写生が引きしまらない。観察の点で西谷さんに負けたわけだ。」

〔第三卷第一号〕昭和七年一月一日

このほか、綴方と自由画の選外佳作に六人の子どもが入っている。

▽綴方選外佳作 ○宮崎山田トシエ ○同朝倉ミドリ

○宮崎濱田ヨシエ

▽自由画選外佳作

○宮崎岩田マス子 ○同黒木勝
○同朝倉ミドリ

なお、この号には新美南吉の有名な童話「こん狐」が掲載されている。

〔第三卷第三号〕(昭和七年三月一日)は、高森通夫の自由詩一篇のみである。

日向 (佳作)

宮崎県宮崎中学校一年生

高森通夫

近頃は秋だよ。

つめ切るに、かげは寒いよ。

日向でつめ切ると、

なつかしい思ひ出がうかぶよ、

地とりして遊んだころの。

つめは靴のそばに落ちるよ。

朝

こじきの子のおとしたお菓子、

今は日向になつてゐる。

蟻がそれををはこばうとしてゐる。

〔第三卷第三号〕昭和七年三月一日

この「日向」という作品を見ても、高森通夫はまさに「赤い鳥」に場を得た子どもだったと言えよう。お菓子を落とした「子ども」に目がいかないわけではない。が、その姿をストレートに描くわけではな

く、「お菓子」を落とした時には蔭だった所が日向になってから蟻が「お菓子」を運んでいくという描き方で、「何か」を感じさせようとしている。前半と後半を「日向」で統一しようとして作品としては失敗しているが、抒情的に描こうとする高森通夫の特性はよく出ている。

「第三巻第四号」（昭和七年四月一日）には、草川小学校の子どもの綴り方が掲載され、鈴木三重吉の長大な評が載っている。また自由画には同じく草川小学校の四年生、西谷ミヤ子の蘇鉄の絵が掲載されている。西谷ミヤ子は「第二巻第六号」で自由画の特選（「えぞ菊」）になっている子どもである。この第三巻第四号では綴方選外佳作にも選ばれている。

*自由画

「庭のそてつ」 西谷ミヤ子 宮崎県東臼杵郡草川小学校尋四

▽綴方選外佳作 ○宮崎西谷ミヤ子 ○宮崎小川ヒロエ

○宮崎朝倉ミドリ

▽自由画選外佳作 ○宮崎岩田マス子 ○同岩田壽子

綴方「ながれ舟」は、綴方欄の筆頭に掲載されている。作者を思わせる少女と大人の男性の二人が沖を見つめている挿絵付きである。鈴木三重吉の評も長いもので、この綴方が高く評価されていることが分かる。

ながれ舟（佳作）

宮崎県東臼杵郡草川小学校尋四

朝倉コトリ

二三日前のことであつた。私たちがぬくたもりでおかあさんやみどりさんのうちのおかあさんたちとぬひものをしてをると、急に風がはげしくなつて来て、海の水は冬の寒い風の日らしくなつて来た。

おかあさんたちは、いかつり舟がおきの方へ出てゐましたから、心配せられた。私が沖をふり向いて見ると、小さないかつり舟は村へひきかへしてゐましたが、又もとをつたばしよへあとがへしてゐました。それからいつときたつと、さんちをぢさんが山から両眼鏡をもつて走つてこられた。さんちをぢさんは、両眼鏡でしろけむりの立つてる沖を見ながら「あらだりかしらん。」とつぶやいてゐられました。するとどこからか、三ぞうのちがつた舟が一しよに波にのまれさうに島に向つていきました。さんちをぢさんは、なほもよく見てゐられましたが、

「あらひつくりかやつた。」とさげられると走つていかれましたが、「あんちゃん、あんちゃん」とおどろいたやうにして、みどりさんのうちのおとうさんをよばれた。すると、上の方の道からかけおりてくる音がしたので、私が上を見ると、みどりさんのおとうさんである。をぢさんが、

「いまどこにかしらんが、舟がひつくりかやつたわ。」とおつしやると、おどろいてすぐに「どこか。」と目をまるくしてみわたされた。「あしこだ。」と大きなこゑでいはれたかと思ふと、すぐに、「わんどま、はよいんで、きかいせんをやれ。」と私のうちのうら山に目白とりに来てゐた子供にどなられた。六人の村の子供は、だまつて返事もしないので、しかたなしに、さんちをぢさんは、はしつて村へしらせにいかれた。私も一しよに走つて家へかへつた。おとうさんは、かまとわらを持つて、うちをでようとしてをられましたので、私が、「あんの、今、舟がひつくりかやつた。」といふと、おとうさんはびつくりして、「どこぢや。」といはれた。「あしこん、じようぎが入つとこ

ん、西の方にしまがあるがやの。」といふと、ひきかへして、「いかにやならん」といつて、かまやに、いそいではいられた。するとおしつなから、きてゐられた、こさをちさんが、

「ふねのりがをんのや。」とたつねられたが、みんなをられないので、「ふねのりがをらんわね。」といひながら、又私たちがもとをつたところへはいつていかれた。

私はそのとき、まあ、あの人にだれもたすけにいかなかつたら、あの人はもう死んでしまはれるだらう、かはいさうだな、とおもひ家にはいりました。けれども心配でくく又もいつてみました。ちょうど私がいつたはないに、おしき舟をこぎになやのをちさんところの、五十ばりきのきかい船が東の方をむけてはいつていきました。をとうさんは、

「いけだんてやが。おしきぶねを、たすけにとぢやん。ありがたいな。たいがい、いのちには、せやわねわ。」とおししやつた。

いつときたつと、おかあさんがこられたので私が「今、おしき舟むけにいけだんがいた。」といふとおかあさんはおとうさんに、「おまや、はよ、やしんはまによぞが着物をもつていらつしやい。」といはれた。すぐにお父さんはうちへかへつてねえさんに「ひつこみから、あんちゃんを着物をもつてけ。」といはれた。ねえさんはすぐに二枚もつてきてもたせてやりました。おとうさんはほかぶりして、うちの向うの坂を走りあがつて行かれた。ちようど大きな池のあるところに行つたら、向うから、二人だれかきて、おとうさんに、「おまやどこにいくとの。」といはれると、「おしきのものに、きものをもつていつてやりよつとよ。」といはれた。その人が、「もうおしきは、くぢ、いによるばい。」と言はれると、父はひつかへしてかへつてこられた。そしてしばらくたつてうちの前を通つていかれた。

私がかないそうの方に行くくと、さつきの舟の一そうは、さきの方が

らだんくとしずもつてゐた。そのとき兄さんたちは、はつどうきにのつてゐたさうである。又ほかの小さな舟は、水くみが一しやうけんめいであつたさうである。

あとで友だちの話をきけば、みんなかやつたのは十さうで、そのふねにのつてゐる人は、十五人だつたといふことで、そのうち一人はなくなられたといふことである。たすかつた十四人は、赤水や細島から汽車でたいがいかへつてこられたさうである。

私はあの一人の人は海の底のどこかに死んでゐられるであらうとおもふとぞつとする。

(第三卷第四号) 昭和七年四月一日

*鈴木三重吉綴方選評

朝倉さんの「ながれ舟」は、かけはなれた方言を話す土地の人なので、四年生でも標準語の操作が窮屈ですが、そのかはり、表出がいかにも素朴で、純真なのがこの上もなく快い。たゞ一つ、最初の方で「私が後をふり向いて見ると、小さないかつり舟は村へひきかへしてゐましたが、又もとをつたばしよへ、あとがへしてゐました」といふところは言ひ方が混乱してゐて、人にくびをひねらせませす。「ふり向いて見ると、さつきは村へひきかへしてゐたいかつり舟が、又もとをつたばしよへ、あとがへりをしてゐました」といふ意味でせう。全たいにわたり叙写は深みのない平浅なものです、それでも、語彙のつかみ方の的確さと、表現の純朴さと、朝倉さんの、人間的純粋味そのものゝために、気分的にしつとりと、まとまつてゐて、全篇的に活現的な或陰影を帯びてゐるところが勝利です。近所のをちさんが、あれてゐる海を双眼鏡で見ながら「あれは、だれだらう。」と言つてゐるうちに舟が引つくりかへる。びつくりして「あんちゃんく」と、みどりさんのうちのお父さんをよばれる。お父さんが下りて来て「どこか」

と目をまるくして見まはし「おまいどもは、早くかへつて、機械船を出すやうにさう言へ」と、目白をとりに来てゐる子どもにも言はれる。以上のところもその場のうごきが気分的によく出てゐます。朝倉さんがうちへとんでかへつて、お父さんに出来ごとを話すところでの二人の対話も、やがて機械船が出るのを見て「やあ、池田の船がたすけにいく。ありがたいな。あれがいけば、みんなの生命もたすかる」といはれる一人ぜりふも、お母さんが、お父さんに向つて「早く浜へ着物をもつてつておやり」と、つぶぬれになつて救ひ上げられた人への着物の手はひを言ひ出される対話も、すべて生き／＼してゐます。お父さんが着物を持つて出かけられる途中で、二人の人に出会はれる、あすこでの「おまいはどこへいく」「船のものに着物をもつてつてやるところだよ」「もう、こいがかへつていつてるよ」といふ対話も、よく場面を躍動させてゐます。かうして見て来ますと、叙写の上での対話の効果といふものは非常に大きなものであることが感じられるでせう。よく、いろ／＼の事件を対話を一つもまじへないでかいたりする人がありますが、多くの場合、対話なしではとかく輪郭的に終り、活性性が稀薄です。仮に朝倉さんのこの作から、さきあげた対話を全部のけたら、どんなものになるでせう。要するにこの作は純感的な、あくまでかはいらしい作です。一篇を通じて、あゝした遭難にたいする、すべての人々の合同的な純情そのものが、よく印象されてゐるのも貴い収穫です。

〔第三巻第四号〕昭和七年四月一日「講話 通信」

冬の日の突風にあおられて遭難したいかつり船のことを書いた作品だが、その様が実に生き生きと描かれている。鈴木三重吉は「対話の効果」を説いているが、それは方言の効果でもあり、地域性とともに、子どもの心情を生き生きと描き出している。出だしも、「私たちがぬ

くたもりでおかあさんやみどりさんのうちのおかあさんたちとぬひものをしてをると」と、自分たちが暖かい所におり、突然の風で寒い海に目をやるといかつり船が遭難しかかっているという対比的な構成で、巧みである。鈴木三重吉が文の乱れを指摘している「私が沖をふり向いて見ると、小さないかつり舟は村へひきかへしてゐましたが、又もとをつたばしよへあとがへしてゐました。」という箇所も、村へ引き返そうとして強い風にあおられ、押し戻されてしまう様がよく出ている。

三重吉の言う「合同的な純情」とは、「いかつり舟」の遭難という事件にあつて、村人の心が「救助」に向かつてすぐに一つになることを言っているのだろう。その中であつて、目白取りに来てゐる六人の子どもたちだけが動こうとしないのも、対照的で、印象に残る描き方である。

〔第三巻第五号〕(昭和七年五月一日)では、「自由詩選外佳作」に高森通夫が入っているだけである。

〔第三巻第六号〕(昭和七年六月一日)には、草川小学校の四年生二人が自由画に入選し、山本鼎の評を得ている。選外佳作にも、四人が入っている。

*自由画

「みかんの木」 高橋トモヨ 宮崎県東臼杵郡草川小学校尋四

「裏山」 倉田キクエ 宮崎県東臼杵郡草川小学校尋四

*山本鼎評

「みかんの木」高橋トモヨさん画。黒木さんのみかんの木よりは観察が少々簡単だが、しかしやはり幹ががっちりかけてゐてよらしい。殊に根のところは力がいづつてゐて結構です。

「裏山」倉田キクエさん画。味のよい絵ですね。デッサンもあり、色もよいが、たゞこの絵はちと描き足りないです。

▽自由画選外佳作 ○宮崎岩田壽子 ○同高月春子

○岩田マス子 ○高橋ヨシ子

「第四卷第三号」（昭和七年九月一日）には自由詩欄そのものが無く、後の北原白秋と鈴木三重吉との確執の始まりを思わせる。

「第四卷第四号」（昭和七年十月一日）には、綴り方で有名になる豊田正子が「うさぎ」という作品で佳作になっている。

「第五卷第一号」は、奥付は「昭和七年十二月一日」の発行になっているが、表紙では「昭和八年一月一日」発行になっている。「第五卷第二号」も奥付では「昭和八年一月一日」発行になっているが、第三号から三月一日づけになっているので、第二号までの奥付は印刷ミスである。「赤い鳥」の基盤の揺らぎを思わせるような出来事である。

※「第五卷第一号」（昭和八年一月一日）

みかん

宮崎市宮崎中学校二年生

高森通夫

はじめて食べた、みかん、
つめたい、すっぱい、みかん。
はじめて、みかん食ふころ、
るなかは、ちようどお祭、
露天に売つてる、みかん、
つめたい、すっぱい、みかん、
はじめて、みかん食つた。

初めてみかんの出まわる季節になったのだろう。蜜柑を食べると故郷を思い出すということだろうが、高森通夫の作品にしては稚拙である。高森通夫は、この号では「童詩、童謡」の選外佳作にも入っている。

※「第五卷第二号」（昭和八年二月一日）

成績発表のあつた日

宮崎市宮崎中学校二年生

高森通夫

夕日の残つてゐる運動場、
たゞこの運動場だけ、
夕日がのこつてゐるやうな、
さびしさ。
あさぎ色の空に、
五月の鯉が泳いでゐる。
舎生が運動してゐる。
白パンツ、青のユニホーム。
夕日は、夕日は、
つかれきつてゐる。
神武のうす暗い森は白つぼく、
成績発表のあつた日、
道場のそばに腰かけて、
僕は一人、
運動場をながめてゐる。

夕日を「疲れきっている」と言い、運動場を一人眺めているのであるから、成績が思わしくなかったのだろう。空には、男の子の成長の象徴である鯉のぼりが泳いでいるというのに。旧制宮崎中学校は現在の県立大宮高等学校であるから、ここに出てくる「神武のうす暗い森」は、すぐ近くにある宮崎神宮の森である。道場は武道場だろうが、運動場に面して建てられていたのだろうか。そこから神武の森が見えるというのであるから、周りは平屋で人家も少なかったのだろう。

「第五卷第三号」（昭和八年三月一日）では、再び「自由詩欄」が消えている。

「第五卷第四号」（昭和八年四月一日）には、講話通信欄のカットに高森通夫（宮崎中学校二年生）の絵が採用されている。高森通夫は絵も描いたのである。

（五）北原白秋選から鈴木三重吉選へ

↳土々呂小学校の出現↳

「第五卷第五号」（昭和八年五月一日）にも自由詩欄が無い。そして「第五卷第六号」（昭和八年六月一日）から北原白秋が退き、鈴木三重吉が自由詩欄の選者を兼ねることになる。そのことについての説明はなく、「講話通信」欄に、

「今月号から私が欠かさず自由詩の選をすることにしました。従来の児童詩謡欄は廃止します。併し、すぐれた新作家を世間に推薦したい熱意がありますので、御自信のある傑作がお出来になりましたらお送り下さいますやうに。作家なみに待遇して発表します。」とあるのみである。

北原白秋はこの鈴木三重吉との絶縁に至る経緯について、『赤い鳥』との絶縁（『全貌』第一輯）の中で、詳しく述べている。

「最近の重大事は『赤い鳥』との絶縁である。

わたくしはその四月号かぎり『赤い鳥』とは絶縁することにした。何故かといふことは一には、鈴木三重吉君とわたくしの性格の相違から来たものと信ずる。忍ぶだけはわたくしも忍んできたと思つてゐるが、どうにもならない感情が前年の夏頃から兆し初めたのも事実であつた。それは鈴木君が酔狂してわたくしの両親の前でその習癖の暴状を發揮したこと両親の深く歎くところとなつたことから、わたくしもつくづく考へたのである。はつきりと書いた方がよいと思ふから書いて置く。両親は切に絶交を子のわたくしに勧めた。その時一回、九月号をわたくしは休んだ。それでも同君夫妻が陳謝した故児童の爲にもまた続けることになつた。ただ何となく『赤い鳥』に対して熱意を失ひかけて来たのも事実である。一つには、両者の性格や情感を調節する以前のやうな小野浩、与田準一両君のごときよき編集助手をして其社より去らしめたことにも基因する。」

これによれば、基本的に両者の性格の違いがあつたこと、それを調節する役目を果たしていた与田準一等が「赤い鳥」から去つたこと、三重吉が酒を飲み白秋の両親の前で「暴状を發揮したこと」が原因のようである。

しかし直接の原因は、原稿の遅れた白秋に対し、鈴木三重吉が児童自由詩の選者を自分と交代するよう申し入れたことにあるようである。

「多忙な君をこれ以上煩はしては済まないから、今後児童の自由詩は白秋顧問として自分に選ばしてくれ、僕だつて詩はわかるよ、募集童謡のやうな尿くさいものは止さうぢやないか」（『赤い鳥』との絶縁）白秋は鈴木三重吉がこのように言つたと書いている。白秋側からの発言であるからこの通りに三重吉が言つたかどうかは分からないが、

少なくとも白秋はこの申し入れに対し、深く誇りを傷つけられたようである。

「この根本的の冒瀆は不用意の失言では決してないことと思ふ。もともと童謡と童謡（自由詩を含む）の領域は互に侵犯すべからざるものとして互にその仕事を尊重しその人を敬愛して、この十六年間に提携し来たつたのである。赤い鳥の童謡運動は主として誰が中心を成し、その自由詩は誰が提唱し開拓して今日に到つたかは、世の周知の事であらうと思ふ。『赤い鳥』の童謡、ことに自由詩は白秋あつて初めて意義があるのである。他の何人が行つても此の意義は失はれて了ふ。しかもまた『赤い鳥』に於ての眞の創作は童謡と児童の作品以外に何があつたか。又童謡欄から五六人の新人を世に送つたことがあつても、童謡作家の幾人を『赤い鳥』は育て上げたか。童謡の新人推薦を廃し、児童の自由詩に於て散文家の鈴木三重吉君自身が、生みの親である詩の白秋に代つて果してよい結果を将来するであらうか。」（同前）

自負に満ちた文章である。「赤い鳥」の童謡・児童自由詩を育てたのはまぎれもなく白秋であり、何人もの童謡詩人を生み出したのも事実である。しかし新美南吉など優れた童謡作家が生まれているのもまた事実である。「赤い鳥」が童謡詩人と童謡作家のどちらを多く生み出したかなどという些末なことにまで言及したのは、白秋としては、「互に侵犯すべからざるものとして」あつた領域に、三重吉が入り込み、自分でも詩の選はやれると言つたことに我慢がならなかつたのであろう。ただ、白秋は「三月号分を一回なまけたからといふのか」「わたくしは十六年間に、月に千二千の児童作品を選び、その層積二十万三十万にのぼり、苦心に苦心を重ね、決して懈怠はなかつた筈である」とか、「止むを得ざる休選も本年に入つたものの一回である」と、何度か原稿の問題に触れているから、そうしたところに三重吉側からの不満はあつたのだろう。

「第五巻第六号」（「講話通信」欄）の選者交代に関する鈴木三重吉の素つ気ない言葉にも、白秋は憤りの言葉を連ねている。

「わたくしは一度見て唾然とし、再び見て、激怒し、三度見て苦笑した。これがこの十六年間の精神的提携者への愛であり義であり礼であらうか、これが、雑誌経営者よりする白秋への挨拶であらうか。かゝる冷々淡淡たる白秋無視が、此の『赤い鳥』の児童の世界に於て、果して許さるべきであらうか。これが、かの常に芸術尊重を説き、常に紳士道を口にした見識家の鈴木三重吉その人の態度であらうか。」

「此の彼の六号文こそは、白秋に対する全然の無視である。感情は兎も角として儀礼としても一応の送別の辞はあつてもよい筈である。これが永年の親友の態度であり、情誼の現れであらうか。」（同前）

白秋の言い分もつともであるが、鈴木三重吉の側もそれだけ不快なものが心中にあつたのであろう。白秋は『赤い鳥』の自由詩はここに愈々埒外に奔逸し衰亡するであらう」と述べているが、こうして白秋と三重吉は袂を分かち、「赤い鳥」は徐々に終焉へと向かつていくことになる。

なお、この「第五巻第六号」は昭和八年「六月一日」の発行であるが、奥付では「昭和八年五月一日」となっており、印刷ミスである。表紙には正しく記載されている。この印刷ミスは次の号にも及んでいる。「第六巻第一号」の奥付は「六月一日」発行となっているが、正しくは「昭和八年七月一日」である。

※「第六巻第一号」（昭和八年七月一日）

この号から、自由詩の選は鈴木三重吉である。

つばき

高見茂夫

うちの、うへには、
つばきが、いつばいさいてゐる。
はなをとりにつた。
とつてすうた。
あまいかつた。
せつべくすうた。

白い花がゆれる。
とつてゆすぶれば、
がらくちらくち
ちひさな、おとだよ。

ダイク

宮城県土々呂小学校尋二

戸松愛明

▽自由詩選外佳作 ○宮崎高森通夫 ○宮崎吉永民雄
○同高橋忠男

「青呂小学校」は「土々呂小学校」のミスである。この号から土々呂小学校が登場してくる。「土々呂尋常高等小学校」は、児童数一三四六、学級数二七（昭和七年）の学校である。指導者は生活綴方で知られる木村壽である。木村壽については後に詳述する。ここでは作品の紹介にとどめる。なお、「第六卷第二号」で、作者の所属県名が「宮城県」となっているのは、「宮城県」の誤りである。

ダイクガ、
シキシキヲツクツタヨ。
ヒデチヤンガキテ
ミテキルヨ。
ソトハサムイヨ。
ダイクガ、
イタヲハツタヨ。
カナツチガ、
トツテン イツタヨ。

※「第六卷第二号」（昭和八年八月一日）
「梅の実」（自由詩） 鈴木三重吉選

がらがらぐせ

宮城県土々呂小学校尋二

吉井巳義

どてに、ひらいてゐる、
がらがらぐせ。

なのはな

宮城県土々呂小学校尋二

高橋忠男

なのはな、
はたけにさいたよ。

なのはなの、ねきは、
 なしの木があるよ。
 なしのはなめが、ふくれてゐる。
 なのはなが、むかうにもさいてゐる。

これまで、宮崎県の小学生の詩は中学年以上のものだったが、土々呂小学校の登場で初めて低学年の詩が掲載されることになる。木村壽は昭和七年に土々呂小学校に赴任し、同九年までの三年間、一〜三年を受け持った。「赤い鳥」に掲載されたものは、その時期に指導したものの一部であるが、低学年を対象とした初めての作品という意味でも、木村壽の仕事は貴重である。なお、「ダイク」の「シキシキ」は敷居のことである。

他に選外佳作として二人の名前が見える。

▽綴方選外佳作 ○宮崎永井靖一郎

▽自由詩選外佳作 ○宮崎高見啓

「第六卷第三号」(昭和八年九月一日)には「自由詩」欄がなく、「綴方選外佳作」に宮崎から「中雄吉」の名前が見えるのみである。「第六卷第四号」(昭和八年十月一日)には、久々に草川小学校の子どもの詩が掲載されている。それに高森通夫の作品である。

※第六卷第四号 昭和八年十月一日 (十月号)

「くりん草」(自由詩) 鈴木三重吉選

ぐみ (佳作)

宮崎県東臼杵郡草川小学校尋五年

濱田ヨシエ

ぐみがなつてる。

まつ赤になつてる。

風が、そよ／＼ふくと、

お祭のやうに、にぎやかだ。

古馬車

宮崎市上野町二丁目中尾方

高森通夫

町の裏通を古い馬車が行く。

灰色じみた馬車。

昔は赤かつたらしい

車台の一部も灰色じみて、

くもり日の町をたまたつていく、

なつかしい古馬車。

昭和八年の『宮崎県学事関係職員録』(五月)には、草川尋常小学校に平田宗俊の名前が見える。同九年版には名前がないから、これが平田宗俊が草川小学校で関与した最後の掲載作品ということになる。

「古馬車」も高森通夫らしい作品である。古い馬車を見て昔を懐かしむという構図は、初めて出まわったみかんを食べて故郷を想うという「みかん」(第五卷第一号)と同じものである。

宮崎の子どもの詩が掲載されるのは、これが最後である。

その後の選外佳作等は、次の通りである。

※「第八卷第三号」(昭和九年九月一日)

「赤い鳥」愛読者名簿 宮崎南小学校読書会殿

※「第九卷第一号」(昭和十年一月一日)

▽綴方選外佳作 ○宮崎福岡ナミ

※「第九卷第二号」(昭和十年二月一日)

愛読者名簿 宮崎梅田清 宮崎野邊保

※「第十一卷第三号」(昭和十一年三月一日)

▽自由詩選外佳作 ○宮崎平田美吉

(六)「赤い鳥」の終焉

昭和十一年十月一日発行の「第十二卷第三号」は、鈴木三重吉の追悼号である。これをもつて、「赤い鳥」は終焉を迎えたのである。「赤い鳥」の主筆者である鈴木三重吉は、昭和十一年六月二十七日に世を去っていた。

それにしても、宮崎の子どもの最後に掲載された作品が、草川小学校の子どものものであり、高森通夫のものであったことは、象徴的である。そして終焉を迎える「赤い鳥」に、次の時代を背負うこととなる土々呂小学校が顔を出していることも、歴史的に見ると、ある種の感慨を抱かせる。

また、現在は延岡市に属するこの土々呂小学校も、当時の住所は「東臼杵郡伊形村」であり、草川小学校や高森通夫の居た東郷小学校と同じく、東臼杵郡の学校なのである。都城の梅北小学校から始まった宮崎県の児童詩教育ではあるが、その後の展開はほとんどが東臼杵郡の小学校を中心にしており、それを可能にしたものが何であるのか、興味あるところである。しかし具体的な資料はない。東臼杵郡は若山牧水を生んだ土地であり、当時は山間部の僻地校の多い区域であった。

それだけに新しい文化や教育に触れさせようとする教育的な意識が地域的にあつたのではないか。そしてそれに応えようとする教師たちが、そこに居たのである。

滑川道夫はその著『日本作文綴方教育史2』(明治図書)の中で鈴木三重吉の方言論に触れ、次のように述べている。

方言で綴方を書く、教師は標準語に訂正して書き直しを命ずるのが、このころ一般的な情況であつた。方言卑下の傾向があり、子どもたちも「わるいことば」として教えられた時代である。「赤い鳥綴方」に共鳴共感する教師たちは、方言で自由に書かせるようになる。そうした作品が「入賞」になつて三重吉に励まされると、その傾向が当然助長される。標準語では、居すまいを正して観念的な作文になりがちであつたものが、方言で書くことによつて生彩をおびてくることを、指導者がのみこんでくると、農・漁・山村の小学校からの投稿が増加していった。「赤い鳥綴方」は、地方の教師に味方する印象を与え、はげましにもなつた。しかも、児童に代わつて、教師が指導作品から選抜し、まとめて三重吉に送稿する傾向を生じた。「入賞」作品が出ると、その学校のある地域が関心をもつて投稿が多くなる。(略)その地域には、かならず中心になる「赤い鳥」派教師があつて、グループが形成され支持者(投稿者)となつてひろがった。

(三四〇頁)「三重吉の綴り方言論」

宮崎県においてなぜ山間部である東臼杵郡が「赤い鳥」の拠点になり得たか、その理由の一端がここにはある。草川小学校の綴り方は、さしもの鈴木三重吉をも「分らない」と嘆かせたほどに方言に満ちていた。それ故に実に生き生きと写実されている。山間部や農漁村の子どもたちに「赤い鳥」を読ませ、作文を書かせる教師たちの胸には、

そうした子どもたちに自信を持たせたいという思いもあつたのだらう。

東臼杵郡と「赤い鳥」との結びつきは東郷小学校に始まるが、東郷小学校が滑川の言うような傾向を示さなかつたのは、最初の入選が綴方ではなく児童自由詩であり、それが高森通夫のものだったからである。高森通夫は前述したように経済的にも恵まれており、資質的にも方言で生活を描くタイプではなかつた。指導者がいた可能性はあるが、高森通夫は一人でも投稿し得る力と環境を持つていた。事実、旧制中学校に入つてからも独自に投稿を続けている。滑川道夫が言う「赤い鳥」の特徴を持つていたのは、まさに草川小学校である。平田宗俊という指導者を持ち、全校での取り組みもあつて、一校から数多くの入選者、選外佳作を出している。

これに対して土々呂小学校は、北原白秋が「赤い鳥」から身を引き、鈴木三重吉が児童自由詩の選をするようになってから登場している。木村壽という指導者を持ち、一校から複数の入選者を出すという傾向を持つという意味では草川小学校と同じだが、木村の場合は学校全体の活動というより、あくまで個人的な教育活動であつた。「赤い鳥」の終焉期に一度だけ顔を出すというのは、次の生活綴方の中心的な存在となる土々呂小学校の歴史的な位置を感じさせる。

「赤い鳥」を舞台とした宮崎県における活動は、他県に比べて、より活発だつたとは言えないかも知れないが、東臼杵郡という一地域を中心としながら、それぞれに特徴をもつた展開をしていたのである。

(七) 北原白秋編『日本幼児詩集』

『日本幼児詩集』は「赤い鳥」とは直接関係ないが、北原白秋の編集であり、収録された作品が期的に「赤い鳥」と重なるということ、宮崎県からも入選者がいるということ等から、これについても触れて

おくことにする。

昭和七年四月、采文閣から北原白秋編『日本幼児詩集』が刊行された。^(注)「解題」によれば、大正十一年から昭和六年にかけて書かれた幼児の詩を集成したものである。

主として雑誌「コドモノクニ」に抛り、これに白秋の提言に共鳴した保育者たちから集められたものや「単行の詩集として上梓されたもの」から白秋が「選抄して加へたもの」など、「七章三百八十五篇」を収録している。

「序」「解題」「幼き者の詩」「日本幼児詩集」という構成である。

「幼き者の詩」は、大正十二年五月に雑誌「女性改造」に掲載された「幼児の詩に対する論考」とでも言うべきものである。

「日本幼児詩集」は、次のように、年齢別(数え年)に幼児の詩を収録している。

- 「乳と月」 二歳三歳
- 「太陽さん」 三歳
- 「驢馬の色」 四歳
- 「お花が揺れる」 五歳
- 「火は生きてゐる」 六歳
- 「雨の葡萄」 七歳
- 「蟻のやうな家」 八歳以上

白秋の二人の子ども、北原隆太郎、篁子の幼児詩も収められているが、宮崎県からは、「火は生きてゐる(六歳)」に、簗部秀司という子どもの詩が二篇掲載されている。

象の鼻を
もつてゐて、
とんとんと
雨戸をたたく。

風

風さんが
ご本よんでる、
お机の上の
ご本よんでる、
頁をくるのが
はやいこと、
風さんが
いそいで
ご本よんでる。

仙台

石川業六

「松風」(簗部秀司)にしてもこれらの「風」にしても、幼児が思
つたことそのままであり、感情の動きそのものである。
「日向の坂道」(簗部秀司)の前後には、「朝」「日向」「すかして見
たら」「夕焼け」など太陽に関する詩が並んでいる。

朝

静岡

佐藤文彦

母ちゃん
あのお山はなぜあんなに赤いの。
……

さう

ぢやあきつと暖いねえ。

母ちゃん

あのお山から海が見えるの。
……

さう。

母ちゃん、

あのお山からお船も見えるの。
……

さう。

母親の言葉は書き込まず、子どもの問いかけだけで成り立たせてい
る独特の表現である。

日 向

土屋尚夫

ほしたお布団あつたかい、
ふくらんであてあつたかい、
おひさまのほひがする、
かすりのおべをきてみたら
くさりのやうにおもかつた。

干した布団は暖かいけれども、かすりの着物は干さなかつたので重たいという意味だろうか。

夕ゆふ焼やけ

東京 井上 尚

夕ゆふ焼やけ、小こ焼やけ
今日の夕ゆふ焼やけ、きたないな。
古い夕ゆふ焼やけ出したのだろう。

思わず笑ってしまう。これは子どもにしか書けない詩である。発想自体が新鮮である。夕焼は美しいものという固定観念がある大人では、こうはいかない。

白秋が幼児詩に注目するのは、「彼等そのものが詩そのものの詩の発想そのもの」だと考えるからである。

「幼児はいかなる詩の天才者とも、その光輝を争ふに相当な素質を現します。幼児こそ生のままの詩人であるとも云へます。求められずして彼等は歌ひ、それ自身の詩をまた知ることなく忘れてゆく。さうした瞬間を、その保護者の手で永遠に留めて置いた詩、さうした詩が之等の詩であります。」

「子供は生れながらに詩人です」という白秋は、「子供が詩を歌ふことは子供としての本然」であり、「これを阻止することは彼等の呼吸を阻止する事」だと言う。白秋にとって、そこに、詩を何のために書かせるかなどという問題は、起り得ないのである。

今でこそ「口頭詩」という言葉が使われているが、この時代に幼児の言葉を詩として認識していたのは、おそらく白秋以外にはない。

「日本の幼い子供たちの詩集、此の日本幼児詩集こそ、日本で最初の総合的幼児詩集であります。わたくしは朗らかに、此の詩集を世界に贈り、明らかに満月のごとき微笑を以て、此の歎びを日本の家庭や幼稚園に頒ちたいと思ひます。」
白秋は、このように誇らかに述べている。そして宮崎にも、白秋の考えに賛同し、幼児の詩を投稿した人がいたのである。

注 1

「間世田重義」は、同窓会名簿では「間瀬田」となっている。しかし大正十四年の職員録を見ても「間世田」となっており、「間瀬田」という訓導はない。また同窓会名簿にも他に「間世田重義」という人は見あたらないので、同窓会名簿の誤植であろう。

2

ここでは、復刻版『日本幼児詩集』（一九九四年六月 久山社）を使用した。

附記

本稿は「宮崎県児童詩教育史」の第一部をなすものである。なお「纂部秀司」については第二部で再度触れることにする。

(二〇〇三年四月三〇日受理)